

# 研究活動報告

## List of research activities

(2006年1月1日～2006年12月31日)

ここに収録された題目及びその概要は、学内研究者の発表したもののうち、2006年1月1日より2006年12月31日迄の期間に刊行されたものに限り、論文の性質、発表機関などには一切制限を加えず、すべて規定の用紙で提供された原稿のまま掲載した。なお、掲載順序は、提出順とした。

岩崎 香

〈著書〉

日常的な金銭・貴重品管理に関するガイドライン 日本精神保健福祉士協会編 ヘルス出版 2006. 6

社団法人精神保健福祉士協会権利擁護委員会として長年取り組んできた日常的な金銭・貴重品管理に関して、ガイドラインをまとめた。作成に至る背景、経過、現状に関するアンケート結果、書式、手順書、具体的な事例を含んでいる。社団法人日本精神保健福祉士協会編（全体の編集及び、第1章から第4章、第5章、第6章の一部を執筆）

『精神保健福祉士養成講座精神科リハビリテーション学』改訂 精神保健福祉士養成校協会編 中央法規出版 198-205 2006. 12

精神科デイケア・ナイトケアにおけるソーシャルワーカーの役割・機能について、事例を用いて解説した。第5章第1節第3項「デイケア・ナイトケアにおける精神保健福祉士」を担当。

『精神保健福祉士養成講座精神科精神保健福祉各論』改訂 精神保健福祉士養成校協会編 中央法規出版 50-54, 228-237 2006. 12

①第1章第2節第6項「権利擁護（アドボカシー）」において、権利擁護にかかわる実践事例を通して実際の支援のあり方をわかりやすく提示した。

②第5章第2節「チームアプローチの展開と実際」を担当し、専門職種ของทีม・アプローチについて、事例を提示し、実践に役立つ形で提示した。

『精神保健福祉士養成講座精神科精神保健福祉総論』改訂 精神保健福祉士養成校協会編 中央法規出版 62-92 2006. 12

第2章第2節「精神保健福祉士の倫理と権利擁護」を担当。精神保健福祉士が援助活動を展開していく前提である専門性と倫理、かつ、具体的な方法として、制度として権利擁護実践に必要な知識をまとめた。

〈学術論文〉

精神科デイケアにおけるプログラムの現状と課題 連名者：岩崎 香 広沢正孝 中村恭子 順天堂大学スポーツ健康科学研究第10号 9-20 2006. 3

2005年2月から3月にかけて実施した精神科デイケアのプログラムに関する調査を実施した。調査結果から、デイケアの現状をあきらかにするとともに、今後の課題を明確にした。

ソーシャルワークにおけるアドボカシーの位置づけとその変遷 鴨台社会福祉論集第15号（査読済）2007年3月掲載予定 約10,000字を執筆。

アメリカにおけるソーシャルワークの歴史の中で、アドボカシーがどう位置付けられてきたのか、また、それが日本のソーシャルワークに与えた影響について論じた。さらに、現状に照らし、問題点と課題を明らかにした。

成年後見制度とソーシャルワークにおける権利擁護（アドボカシー）精神保健福祉第68号 1-5 2006. 12

障害当事者の権利を擁護する成年後見人としての実務とソーシャルワークにおける相違について、「自己決定」に焦点化する形で論じた。

## 〈学会発表等〉

精神保健福祉士の専門性と裁量をめぐって—権利擁護機能を中心に— 第41回日本精神保健福祉士協会全国大会・第4回日本精神保健福祉学会 (名古屋) 2006. 6

ソーシャルワーカーを対象に実施したインシデント分析の結果を中心に発表した。アドボカシー・スキルを抽出し、その活用について分析した。

地域生活を行っている精神障害者の金銭・貴重品管理について (中川さゆり 岩崎 香 上野容子他) 第41回日本精神保健福祉士協会全国大会・第4回日本精神保健福祉学会 (名古屋) 2006. 6

地域の福祉施設での金銭管理などの代行業務の実態についてフィールドワークを実施し、事例を集積した。代行する要因として、浪費、搾取などが挙げられ、システムの改変などの提案を行った。

医療機関における金銭・貴重品管理のあり方について (金成 透 岩崎 香 伊東秀幸他) 第41回日本精神保健福祉士協会全国大会・第4回日本精神保健福祉学会 (名古屋) 2006. 6

医療機関において金銭・貴重品等管理代行が行われている背景には現行制度の不備や、機関の認識の乏しさがあり、そうした中で権利侵害を起さないために作成したガイドラインについて発表を行った。

精神科デイケア通所の統合失調症患者に対するダンスアクティビティの試み～気分の変化と症状評価に及ぼす影響について～ (中村恭子 広沢正孝 岩崎香他) 第49回日本病院・地域精神科医学会 (東京) 2006. 10

中村恭子の項参照

「誰のお金なの？」日常生活における金銭・貴重品管理について—ガイドライン発行に至る経緯とこれから— (伊藤亜希子 岩崎 香 伊東秀幸他) 第14回日本精神障害者リハビリテーション学会 (富山) 2006. 11

日本精神保健福祉士協会権利擁護委員会で作成したガイドラインの反響をまとめた。機関が利用者の金銭等を管理することは利益相反であることに関する意識啓発として有効であり、各機関におけるシステムの変革、マニュアル作りなどに反映されていることを発表した。

## 菅波 盛雄

## 論文

全国中学校柔道大会参加選手における *Trichophyton tonsurans* 感染症の調査：菅波盛雄，廣瀬伸良，白木祐美，比留間政太郎，池田志孝，日本医真菌誌 47巻4号 319-324. 2006

低年齢層の柔道選手における *Trichophyton tonsurans* 保菌者の比率とそれによらず環境要因を明らかにしようと試みた。結果，過去に報告例が少ない15歳以下の中学柔道選手にも大規模な感染拡大が確認された。また，陽性者は以下の感染環境因子と有意な関連を示した。

1)男子選手 (女子選手と比較して)，2)頻繁に他団体との練習や合宿を行う選手，3)友人に体部白癬発症者がいる選手，4)現在，または過去に体部白癬発症経験がある選手，5)体重の軽い選手 (軽い階級の選手)，6)大会において上位入賞した選手，7)関東および九州地区の居住選手，8)合宿所で生活する選手 (自宅通学者と比較して) これらのことから，質問紙のみの調査からでも，*Trichophyton tonsurans* 感染状況の把握がある程度，可能であることが伺えた。

つぎに，治療を指導した陽性者の受診状況を追跡調査したところ，受診者は，ほぼ半数にとどまった。また，処方された経口抗真菌剤の内服を中断してしまう例が多いため，陰性化しないケースがみられた。特に低年齢層の柔道選手には，保護者や競技責任者における治療状況の把握や管理の必要性があると考えられる。

## 論文

オリンピック柔道競技の競技分析—1992年～2000年大会を対象として—：坂本道人，菅波盛雄，中村 勇，林弘典，久保田浩史，石井孝法，小俣幸嗣，大学体育研究 28号15-22. 2006

IJFの行ったルール改正が，男性と女性に違った競技傾向をもたらした。

男子は「一本勝ち」が増加した反面罰則による勝利の減少がみられた。これは柔道競技がIJFの意図する積極的柔道の方向に進んでいるといえる。

女子は，「一本勝ち」の増加はみられず，「優勢勝ち」も減少傾向にあった。しかし，罰則による勝利は増加傾向がみられた。これは女子には罰則適用を強化しても，技術ポイントによる勝利決定率を上げることは難しいことを意味している。

以上のことから積極化に関しては、同じルールの運用であっても男女間では同様の試合傾向が期待できないということである。

## 小林 義雄

### 伝統文化としての剣道に学ぶ(講演)

「最新情報を知り、望ましい職業観を育てることや、自分自身の生き方を考えさせる」ことを目的とした「フロンティア講座」において、講演を行った。(2006年12月13日, 東京都立上野高等学校)

## 青木 和浩

### 〈学術論文〉

**本学学生を対象とした体力づくりの意識に関する調査研究** 著者: 木村博人, 青木和浩 東京家政大学紀要 46(1): 19~24, 2006. 3

女子大学生を対象に、体力づくりに関する運動方法や効果についての意識調査を実施した。本学学生の運動の目的は、健康志向やシェイプアップの者が多く見られた。シェイプアップ群・体力向上群は筋力トレーニング対して、好意的な意識が見られた。

**跳躍競技パフォーマンスとパワー系コントロールテストの関連性** 著者: 中丸信吾, 越川一紀, 青木和浩 フューチャー・アスレティック近未来陸上競技研究所紀要 5: 1~3, 2006. 3

走幅跳と走高跳の競技パフォーマンスとパワー系のコントロールテスト種目との関連を検討した。両種目ともメディシンボール投げとの有意な相関関連が見られた。

**ウェイト種目「ハイクリーン」の各動作局面における主観的難易度について—本学学生と体育系学生を対象として—** 著者: 青木和浩, 中丸信吾 立教大学研究報告 スポーツ・健康科学 23: 1~6, 2006. 3

非体育系学生と体育系学生を対象としてハイクリーンの各動作局面における主観的難易度を検討した。各動作局面に対する主観的難易度を両者で比較すると大きな違いが見られた。

**ハンドボール競技におけるシュート・ボールスピードに関わるプライオメトリックトレーニングの有効性** 著

者: 山田一典, 青木和浩, 中丸信吾, 東根明人 ハンドボール研究 8: 104~113, 2006. 7

ハンドボール選手を対象にシュート・ボールスピードの向上を目的とした上肢・下肢・全身のプライオメトリックトレーニングを実施し、上肢・全身群にトレーニング有効性が示された。

**水平跳躍種目における踏切位置の主観的誤差と視機能の関係** 著者: 中丸信吾, 河村剛光, 青木和浩, 越川一紀, 吉儀 宏 陸上競技研究 67: 22~26, 2006. 12

水平跳躍種目における踏切位置の主観的誤差と視機能との関係を検討した。踏切に対する主観的誤差が大きい者は深視力の能力が低いことが明らかになった。

### 〈報告書〉

**ストラトグラムからみた駅伝選手の自己分析** 著者: 仲村 明, 鯉川なつえ, 青木和浩, 須田柳治 東京体育学研究2005年度報告: 21~24, 2006. 1

駅伝選手を対象にストラトグラムを用いて3つの脳のタイプに分類し、競技能力や男女の違いから駅伝選手の自己分析を報告した。

### 〈学会発表〉

**動体視力の発育発達と野球におけるトレーニング方法に関する研究**: 河村剛光, 本田和寛, 吉儀 宏, 櫻庭景植, 青木和浩, 中丸信吾, 戸塚涼子 スポーツビジョン研究会第13回大会: 2006. 10

## 野川 春夫

### 著 書

1. 改訂・生涯スポーツ実践論(編著)市村出版 2006年 10月 執筆者: 野川春夫, 川西正志, 市川朋香, 高橋季絵, 宮崎朋子, 山口泰雄ほか
2. スポーツの百科事典(分担執筆)丸善 2006年 12月 担当: 「スポーツ・ツーリズム」
3. 最新スポーツ科学事典(分担執筆)監修日本体育学会 平凡社 2006年 9月 担当領域: 「体育社会学」

### 学術論文

1. 「ボウリングセンターにおける職務満足とホスピタリティ・マネジメントに関する研究」生涯スポーツ学研究, Vol. 3, No. 1, 1~12, 2006. 共同研究者: 宮崎朋子

2. 「スポーツイベント事業におけるプロセス評価の試み～広域スポーツセンター育成モデル事業を事例として～」生涯スポーツ学研究, Vol. 3, No. 1, 21-28, 2006. 共同研究者: 櫻井 学

3. 「日本スポーツ・マスターズに参加した団塊世代のツーリズム・スタイルに関する研究」生涯スポーツ学研究, Vol. 4, No. 1, 25-30, 2006. 共同研究者: 岡安功, 太田あや子

4. 「広域スポーツセンターをどのようにマネジメントするか～やまぐち広域スポーツセンターを事例として～」生涯スポーツ学研究, Vol. 4, No. 1, 31-36, 2006. 共同研究者: 渡辺泰弘, 松本耕二

5. 「指定管理者による公共スポーツ施設のマネジメントに関する研究」共同研究者: 秋吉遼子・山口泰雄 第57回日本体育学会, 体育社会学専門分科会発表論文集, 70-75, 2006年.

6. 「参加型スポーツイベントの参加者に関する研究～資源交換理論を援用した尺度開発～」共同研究者: 岡安功 第57回日本体育学会, 体育社会学専門分科会発表論文集, 29-34, 2006年.

7. 「団塊世代における社会的支援とライフデザインの関係」共同研究者: 伊藤央二・宮崎朋子 第57回日本体育学会, 体育社会学専門分科会発表論文集, 99-104, 2006年.

8. 「ゴルフギャラリーに関する研究～LPGA ツアーのケーススタディ」共同研究者: 渡辺泰弘 第57回日本体育学会, 体育社会学専門分科会発表論文集, 153-158, 2006年.

#### その他

1. 「ファシリティ・プロデューサーはなぜ必要か」月刊・指定管理 11/12月号2006年

2. 「スポーツ・ツーリズムのマネジメント」体育の科学 Vol. 57, No. 1, 39-43, 2007.

3. 「スポーツマーケティング」体育施設管理士養成講習会テキスト(財)日本体育施設協会編, 2007年5月.

4. 「スポーツ施設のマネジメント」体育施設運営士養成講習会テキスト(財)日本体育施設協会編, 2007年6月.

#### シンポジウム

1. 「オリンピック開催とその影響～アジアスポーツの発展を目指して～」演者 第57回日本体育学会, 日本体育学会本部企画シンポジウムII (国際シンポジウム) 弘

前大学, 2006年8月18日

口頭発表

1. 「What are the Japanese Sport Consumers? Hospitality Perspectives」発表者: 宮崎朋子・野川春夫 2006北米スポーツ社会学学会 (North American Society for the Sociology of Sport), カナダ・バンクーバー市, 2006年11月2日

2. 「Another Americanization—From Yakyuu Fans to Baseball Fans」発表者: 伊藤央二・野川春夫 2006北米スポーツ社会学学会 (North American Society for the Sociology of Sport), カナダ・バンクーバー市, 2006年11月2日

3. 「小中一貫校において子どもの体力低下は止められるか～品川区立小中一貫校の取り組み～」発表者: 池上純夫・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

4. 「前期高齢者の免疫力向上を目指した複合スポーツプログラムの効用」発表者: 野川春夫・青木純一郎・宮崎朋子・畑瀬勇樹 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

5. 「ランニングイベントの参加者の継続行動に関する研究～資源交換理論を援用して～」発表者: 岡安功・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

6. 「剣道における段審査のシステム～剣道継続の一要因～」発表者: 谷口美幸・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

7. 「ネット時代における総合型地域スポーツクラブのコミュニケーション戦略」発表者: 河原行雄・野川春夫・石崎万里 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

8. 「公共スポーツ施設のマネジメントと研究課題に関する研究～タイプの異なる指定管理者のケーススタディ～」発表者: 秋吉遼子・山口泰雄・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

9. 「Jクラブによるスタジアム経営」発表者: 佐藤剛史・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

10. 「プロサッカークラブがつくる総合スポーツクラブ～浦和レッズ・レッズランドを事例として～」発表者: 上代圭子・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会, ホテルエミオン東京ベイ, 2006年10月27日

11. 「総合型地域スポーツクラブ育成推進事業の現状と課題～育成指定クラブへのモニタリング(試案)～」発表者：舟木泰世・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会，ホテルエミオン東京ベイ，2006年10月27日
12. 「ラクロスの新たな普及戦略～指定管理者制度における自主事業に注目して～」発表者：高土麻衣子・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会，ホテルエミオン東京ベイ，2006年10月27日
13. 「ゴルフギャラリーに関する研究～ゴルフギャラリー滞留モデルの試案～」発表者：渡辺泰弘・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会，ホテルエミオン東京ベイ，2006年10月27日
14. 「観戦エリア別における充足欲求と座席選択要因の相違について～千葉ロッテマリーンズに着目して～」発表者：伊藤央二・野川春夫 第8回日本生涯スポーツ学会，ホテルエミオン東京ベイ，2006年10月27日
15. 「指定管理者による公共スポーツ施設のマネジメントに関する研究」発表者：秋吉遼子・山口泰雄・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月18日
16. 「参加型スポーツイベントの参加者に関する研究～資源交換理論を援用した尺度開発～」発表者：岡安功・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月18日
17. 「団塊世代における社会的支援とライフデザインの関係」発表者：伊藤央二・宮崎朋子・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月18日
18. 「ゴルフギャラリーに関する研究」発表者：渡辺泰弘・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月19日
19. 「ボウリングセンターにおけるホスピタリティ・プログラムの開発と妥当性の検討」発表者：宮崎朋子・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月20日
20. 「参加型スポーツイベントの構造モデル試案～団塊世代に着目して～」発表者：市川朋香・野川春夫 第57回日本体育学会，弘前大学，2006年8月20日

廣瀬 伸良

#### 【論文】

A nationwide survey of *Trichophyton tonsurans* infection among combat sport club members in Japan using a questionnaire form and the hairbrush method 著者：

Yumi Shiraki, Masataro Hiruma, Nobuyoshi Hirose, Takashi Sugita, Shigaku Ikeda Journal of the American academy of dematology 54: 622-626, 2006

We sought to clarify the prevalence of *Trichophyton tonsurans* infection among members of combat sports clubs in Japan. We conducted a survey of members of participating combat sports club using a standardized questionnaire to assess background factors and using the hairbrush method to identify *Trichophyton tonsurans* infection. Statistical significance of the correlation between data from the questionnaire and the hairbrush culture results was determined. We surveyed 1000 people (826 male) from 49 institution and found 115 (11.5%) were positive for *Trichophyton tonsurans* infection revealed by the hairbrush method. Demographic factors associated with high positive rates of the infection were familial *Trichophyton tonsurans* infection (20%), history of tinea corporis (24.2%), increased dandruff (32.1%), and concomitant tinea corporis (31.6%). Those with positive hairbrush culture results without current or previous tinea were considered asymptomatic carriers.

#### 【論文】

サッカーの戦術指導と効果：守備戦術トレーニングについて 著者：吉村雅文，廣瀬伸良，山越賢一，青葉幸洋 日本スポーツ方法学第19巻1号：67-80，2006

吉村雅文の項参照

#### 【論文】

全日本柔道強化選手における *Trichophyton Tonsurans* 感染症～欧州遠征前後の調査とその対策～ 著者：廣瀬伸良，菅波盛雄，金持拓身，石井兼輔，木村昌彦，斉藤仁，山本洋佑，渋谷恒男 柔道科学研究第11号：6-12，2006

本研究はH17年全日本柔道強化選手を対象に *Trichophyton tonsurans* 感染症に関する調査と Hairbrush 法による頭部白癬の検査を欧州遠征前後で実施し，その罹患状況を明らかにした．1. 欧州遠征前の頭部ブラシ検査での陽性者は男子選手6.3%，女子選手3.2%であった．2. 欧州遠征帰国後の頭部ブラシ検査においては男子選手16.2%，女子選手8.5%と増加傾向にあった．3. 選手群に感染予防を説明するだけでなく，特に遠征中などは選手同志や指導者が実施事項を確認することが重要であ

ることが推察された。

#### 【論文】

全国中学校柔道選手における *Trichophyton Tonsurans* 感染症の調査 著者：菅波盛雄，廣瀬伸良，白木祐美，比留間政太郎，池田志孝 日本医真菌学会雑誌 第47巻 第4号319-327, 2006

菅波盛雄の項，参照

#### 【雑誌】

講道館杯日本柔道体重別選手権大会 著者：廣瀬伸良 講道館編集柔道 第77巻2号：29-42, 2006

2006年パリで開催されるワールドカップ国別対抗柔道大会代表選手選考会である講道館杯日本柔道体重別選手権大会の詳細を報告した。決勝戦14試合の競技内容については詳細に解説した。

柔道選手のトングランス感染症 その治療と予防 著者：廣瀬伸良 近代柔道7月号：60-61, 2006 ベースボールマガジン社

柔道選手をはじめとする全国の格闘競技選手に感染拡大する *Trichophyton Tonsurans* 感染症についてその詳細と治療，予防の方策を主にジュニア選手を対象にした Q & A 形式でまとめた。

格闘競技選手の皮膚真菌症～ブラシ検査・治療・予防のガイドライン2006～ 著者：比留間政太郎，白木祐美，廣瀬伸良 編集室なるにあ発行

柔道選手をはじめとする全国の格闘競技選手に感染拡大する *Trichophyton Tonsurans* 感染症についてその詳細と治療，予防のための対策をまとめた。全日本柔道連盟公認パンフレットとして全国の登録団体全てに配布された。

#### 須藤 路子

Effects of teaching methods on the acquisition of stress-related and focus-related durational control in English 著者：須藤路子，金子育世 JACET Bulletin 42 (大学英語教育学会紀要第42号)，53-65, 2006.

In this study, we observed the acquisition of durational control in English by two groups of Japanese learners. The two groups of subjects received different teachings for a period of 13 weeks; the focus of the teaching for Group 1 and

Group 2 being pronunciation and conversation, respectively. We have observed notable differences in the degree of attainment between the two subject groups, suggesting the different degrees of effects of the teaching methods on the acquisition of stress-related and focus-related durational control.

英語における音節と interstress interval の持続時間制御—母語習得と第二言語習得の比較— 著者：須藤路子，金子育世 日本音響学会2006年春季研究発表会講演論文集 277-278, 2006. 3

米語成人話者，米語母語話者の小学校3年生と日本人英語学習者の3グループの被験者を用意し，interstress interval (ISI) と音節数の観点から，英語の母語習得と第二言語習得における持続時間制御パターンを観測した。ISI内の音節数に関わりなく，ISIの持続時間は米語成人母語話者が一番短く，次いで日本人学習者，そして米語母語話者の小学生の持続時間が一番長かった。また，ストレスのない音節がISI内に加えられたりして，3つの被験者グループにおいて持続時間の差違が広がった。

日本人英語学習者の TOEIC スコアにおける読解速度の影響と上達度分析 著者：須藤路子，浅野恵子 日本音響学会2006年春季研究発表会講演論文集 411-412, 2006. 3

英語母語話者は読解時に最適な読解速度を使用し，それが知覚における処理速度と関係していると言われている。実験1において，英語学習者の TOEIC におけるリスニングセクションとリーディングセクションのスコアと読解速度との関連を観測・検討した。さらに実験2では，6ヶ月の英語学習後の読解速度と読解能力・聴取能力の上達度を観測した。読解速度の速い学習者は読解処理能力が高く，TOEICのリーディングスコアが高いことが予測されたが，リスニングスコアも高い傾向にあることがこの実験で示された。

英語の内容語と機能語における持続時間制御—日本人英語学習者のリズムパターン習得過程— 著者：金子育世，須藤路子 第20回日本音声学会全国大会予稿集 81-86, 2006. 10

“金子育世”の項参照

英語読解速度・語彙力と TOEIC スコアの関連性の分析—日本人英語学習者におけるリスニング力とリーディング力の上達要因— 著者：浅野恵子，須藤路子 第20回日本音声学会全国大会予稿集 63-68, 2006. 10

日本人英語学習者を対象に，英語の読解速度と語彙力がリーディング力とリスニング力にどのように影響しているかを観測した．さらに6ヶ月の英語学習後における各能力の上達度分析も試みた．英語母語話者に関し報告されている，聴取処理速度と読解における処理速度の関連が，第二言語習得に関しても観測された．また，語彙力のリスニング力への寄与率はリーディング力への寄与率より低いことが観測された．日本人英語学習者におけるリスニング力の上達要因として読解速度が非常に重要な要因であることが観測され，リスニング能力を上達させるためには読解能力の一要素である読解速度を向上させることが有効であることが，今回の研究により示唆された．

**Production of English stressed vowels and interstress intervals within and between words in first and second language acquisition.** 著者：須藤路子，金子育世 4th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, The Journal of the Acoustical Society of America Vol. 120, No. 5, Pt. 2, p. 3170, 2006, 11

In this study, we observed the differences between first and second language acquisition in English durational patterns with respect to interstress intervals (ISIs). Production experiments were carried out by means of two sets of English sentences to investigate the durational patterns used by three groups of speakers: adult native speakers of American English, American third graders and Japanese learners of English. The shortest ISIs were produced by adult American speakers regardless of the number of unstressed syllables in the target ISIs. The Japanese learners produced shorter ISIs than the American children in one set of sentences, while in the other set, the American children produced shorter ISIs than the Japanese.

**An analysis of the factors of reading rate, vocabulary ability and speaking proficiency in relation to the TOEIC scores of Japanese learners of English.** 著者：浅野恵子，須藤路子 4th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, The

Journal of the Acoustical Society of America Vol. 120, No. 5, Pt. 2, p. 3169, 2006, 11

This study investigated the relationships between the TOEIC scores and the two factors of the reading rates and vocabulary abilities of Japanese learners of English. It also studied the relationships between the scores of the two TOEIC sections and the learners' speaking proficiencies. The results showed high correlations between the TOEIC scores and the two factors of reading rates and vocabulary abilities.

### 金子 育世

**Effects of Teaching Methods on the Acquisition of Stress-related and Focus-related Durational Control in English** 著者：須藤路子，金子育世 JACET Bulletin 42 (大学英語教育学会紀要第42号)，53-65, 2006.

“須藤路子”の項参照

英語における音節と interstress interval の持続時間制御—母語習得と第二言語習得の比較— 著者：須藤路子，金子育世 日本音響学会2006年春季研究発表会講演論文集 277-278, 2006. 3

“須藤路子”の項参照

英語の内容語と機能語における持続時間制御—日本人英語学習者のリズムパターン習得過程— 著者：金子育世，須藤路子 第20回日本音声学会全国大会予稿集 81-86, 2006. 10

米語成人話者，米語母語話者の小学校3年生と日本人英語学習者の3グループの被験者を用意し，interstress interval (ISI) と音節数の観点から，英語の母語習得と第二言語習得における持続時間制御パターンを観測した．ストレスのない音節が ISI 内に加えられるにしたがって，3つの被験者グループにおいて持続時間の差違が広がり，持続時間の増加率も被験者グループにおいて異なっていることが観測された．ISI の持続時間増加率と母音の持続時間短縮率から，日本人学習者の持続時間制御に著しい影響を与える要因として，ISI 内のストレスのない音節が2単語以上にまたがるか同一単語内であるかという要素が観測された．米語母語話者の小学生においては，発話スタイルが ISI と母音の持続時間制御に影響を与えていることが本研究の結果から示唆された．

**Production of English stressed vowels and interstress intervals within and between words in first and second language acquisition.** 著者：須藤路子，金子育世 4th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, The Journal of the Acoustical Society of America Vol. 120, No. 5, Pt. 2, p. 3170, 2006, 11 “須藤路子”の項参照

## 柳田 美子

### 著書

生活習慣・主要感染症，社会・環境と健康：管理栄養士合格指導講座演習問題集，(株)桂樹社グループ編，181-183, U-CAN, 2006, 4

新カリキュラムに基づいた管理栄養士国家試験レベルの問題に挑戦するための問題の作成，解説をおこなったものである。

### 論文

大学ハンドボール部男子学生の安静時代謝量に関する研究—トレーニング期のエネルギー必要量と栄養摂取の実態—，(財)日本ハンドボール協会スポーツ医事専門委員会，ハンドボール競技のスポーツ医・科学研究報告，27-35, 2006, 3 著者：柳田美子，増田美穂子，坂本静夫，西山逸成

大学ハンドボール部男子学生の安静時エネルギー消費量は，一般の人より体重当たり3%多かった。また，トレーニング期の摂取量は調整期の1.2倍程度であり，必要量に対し，6%程度少なかった。

「生きがい」を高めるスポーツ：スポーツと健康と臨床検査，(小川秀興，狩野元成，梁井皓監修，伊藤機一，大阪顕通，澤木啓祐，久岡英彦，鈴木政登編集協力)，臨床病理レビュー特集第137号14-19, 2006, 11

生きがいを高めるためには，人生を肯定的態度で臨むことが大切であり，この肯定的態度を高めるのにスポーツは大きな役割を担っている。「生きがい」は直接求めるものではなく，スポーツを通して鍛えたり，人々とのコミュニケーションなど，多様な中から生まれてくるものである。

### 学会発表

スポーツ系大学女子の納豆摂取状況と月経随伴症状に

関する研究 栄養学雑誌 V.64, No5, 442, 2006, 発表者：柳田美子，鯉川なつえ

月経随伴症状に影響を及ぼす要因として，月経前期では納豆摂取頻度の少ない者は，悲観的，集中力散漫，憂うつ，便秘，むくみであり，月経期間中では，引きこもり，1人でいたい，食欲増大等がみられた。しかし，その根底には食事をバランスよく摂取している上での納豆の効果のあることが推察された。

## 北村 薫

### [原著論文]

1. **Motivational Factors Affecting Sports Consumption Behavior of K-league and J-league Spectators.** 著者：元 晶煜，北村 薫 International Journal of Sport and Health Science. Vol. 4, 233-251 2006

本研究の目的は，日本のJリーグと韓国のKリーグの観戦者の消費行動に影響を及ぼすとみられる観戦動機を明らかにし，観戦者のニーズに適合したマネジメントのための基礎資料を提供することである。調査の結果，Jリーグ，Kリーグともに，escape (脱日常性)，player (選手の魅力)，team identification (チームとの一体感)が消費に結びつくことがわかった。

2. **スポーツ経営における市場細分化戦略の活用に関する研究—市場細分化による観戦スポーツの潜在的需分析の有効性を中心に—**，元 晶煜，北村 薫，順天堂大学スポーツ健康科学研究 第10号 29-39, 2006. 3

市場細分化のモデルをコトラーに，その有効性検証の基準をレーマン&ウインターに求め，J大学の学生を対象に調査によりその有効性を検討した。その結果，クラスタリング・セグメンテーションによる細分化モデルの妥当性が十分に確保され，本モデルが観戦スポーツの潜在的需の発見に有効な手段として期待できた。

3. **医療保健と学校教育の協働による地域保健システム構築への組織論敵研究—思春期教育に対するピアエデュケーター養成セミナーの実践事例を中心に—**，水野基樹，田中純夫，臺 有桂，北村 薫，順天堂大学医療看護研究 第2号 29-37, 2006. 3

水野基樹の項参照



## [専門雑誌掲載論文]

自分を知る～「自分の持ち味」を生かしたリーダーシップを発揮するために、北村 薫，介護人材育成 2005 vol. 2 no. 6 32-39, 2006. 1, 日総研出版

リーダーシップを対人影響力ととらえ，対人影響力を規定するその人の持ち味の理解のしかたを明記した。そのうえで，交流分析の理論をもとに，豊かな人間関係を形成する上で重要なライフポジションについて概説し，介護関係の職場において活用できる自己成長への道筋を明らかにした。

## [著書 (啓蒙書)]

社会福祉士・精神保健福祉士受験ワークブック編集委員会編『社会福祉士・精神保健福祉士受験ワークブック2007』(共通科目)「社会学」259-307担当 2006. 7 中央法規出版

2006年度実施の社会学の問題は，社会学のオーソドックスな問題と現代的なテーマを理解できていれば正解を推論できる問題の2つからなることを指摘。内容面で新規の項目を加えて2007年度の試験に向けて傾向と対策，学習内容，重要項目等を示した。

## 土屋 基

女子学生の冷え性と生活習慣に関する疫学的検討：土屋 基，井上忠夫，鈴木勝彦，荒賀直子，樋口和洋，民族衛生，72 (付録)：56-57 (2006. 11)

若年女性の「冷え性」と生活背景の関連を検討する一連の研究の中で，今回は大学生を対象に「冷え性」と生活習慣，身体面及び精神面の愁訴等の関連について検討した。その結果「冷え性」は大学生には43%存在し，高校生の出現率と同様であった。また，「冷え性」は食生活をはじめとするライフスタイルの良否や身体状況，精神状況などと強く関与していることが確認され，この傾向も高校生の場合と同様であった。日頃運動している者と運動していない者を比較検討したが両者に差は認められなかった。

(本研究は2004年度学内共同研究の支援を受けて行なわれた)

女子学生の冷え性と QOL に関する疫学的検討：土屋基，井上忠夫，鈴木勝彦，荒賀直子，順天堂大学スポーツ健康科学研究 10: 106, (2006. 3)

大学生333名が得られた有効回答から「冷え性群」124名 (37.2%) と「非冷え性群」114名 (34.2%) を比較検討し，「冷え性群」は食生活では「間食が多い」，「朝食を食べない」傾向が認められた。また特に疲労，消化器系の不調，意欲の欠如，悩み心配事，情緒の不安定感などの愁訴が優位に高率であることを報告した。

低年齢化が深刻な生活習慣病の予防：土屋 基，栄養教諭 2006年 5号：58-61 (2006. 10)

生活習慣病予備軍としてのわが国と，著者がかかっている千葉県某市における小学生2690名と中学生1783名，合計4473名のデータに基づき，子どもの生活習慣病の実態を明らかにし，子どもの生活習慣病増加の社会的背景及びその予防について論じた。

平成17年度体力・生活習慣病分析報告書：土屋 基，平成17年度市川市ヘルシースクール報告書：市川市教育委員会 (2006. 3)

小学生2690名と中学生1783名，合計4473名を対象に行なった身体測定，新体力テスト，血液検査，ライフスタイル調査に基づきデータ分析を行い，報告した。

手軽にできる運動・遊び：土屋 基，平成17年度 市川市の体育 NO. 2：市川市教育委員会 61-80 (2006. 3)

小中学校の指導者向けに，児童及び生徒が一人あるいは集団で手軽にできる運動遊び13種目を紹介すると共に，その指導のポイントを解説した

## 綾部 誠也

原著論文

Relationship between angiotensin converting enzyme gene I/D polymorphism and muscle strength in elderly. Tobina T, Ayabe M, Yoshitake Y, Kimura Y, Miyazaki H, Ishii K, Zhang B, Saku K, Shindo M, Kiyonaga A, Tanaka H. International Journal of Sports and Health Science. 4. 460-464 (2006)

70歳代の高齢者のコホート調査の結果から，筋力の加齢変化に ACE 遺伝子多型間で有意な差がないことを示した。

The relationship among the physical activity pattern,

**age and body mass index in active elderly women.** Ayabe M, Yim M, Kiyonaga K, Shindo M, Tanaka H. *International Journal of Sports and Health Science*. 4. 528-535. (2006)

高齢者の身体活動水準, 年齢および体格指数に関する横断的調査を行い, 主種の身体活動水準指標 (エネルギー消費量, 歩数, 活動時間) のうち, 3METs 以上の中高強度活動時間が年齢や体格指数との間に関連することを示した。

**Alterations in heart rate, blood lactate accumulation and perceived exertion at lactate threshold as a consequence of exercise training in the elderly.** Ayabe M, Ishii K, Takayama T, Shindo M, Tanaka H. *International Journal of Sports and Health Science*. 4. 536-543 (2006).

高齢者の乳酸性作業閾値に相当する心拍数は, 運動介入の結果として, 有酸素性作業能の改善に伴って上昇することを示した。

**The effect of home-based exercise training using bench stepping on the aerobic capacity, lower extremity power, and static balance in older adults.** Mori Y, Ayabe M, Yahiro T, Tobina T, Kiyonaga A, Shindo M, Yamada T, Tanaka H. *International Journal of Sport and Health Science*. 4. 570-576. (2006)

ステップ運動を利用したホームベース型運動プログラムが高齢者の有酸素性作業能ならびに脚伸展パワーを改善しうると示した。

**Influence of exercise intervention on blood lipid levels, glycometabolism, adipocytokines, and cardiac autonomic function in adolescent females with hidden obesity.** Ishii K, Ayabe M, Okabe T, Iwata T, Takayama K, Yamaguchi T. *Jpn J Phys Fitness Sports Med*. 55(Suppl). S53-S58.

体格指数が25未満で体脂肪率が30%を超える女子学生において, 運動介入が血中脂質と心臓自律神経活動へ及ぼす影響について報告した。

#### 研究報告

**地域住民の口腔保健と全身的な健康状態との関係についての総合研究.** 田中宏暁, 綾部誠也, 飛奈卓郎, 木村靖夫, 吉武裕. 平成17年度厚生労働科学研究費報告書.

2006年3月.

70歳代の高齢男女を対象にした有酸素性能力と口腔保健の関係に関する5年間の追跡調査を報告した。

**温熱環境での身体負荷.** 形本静夫, 綾部誠也. 業務用電化厨房労働環境に関する文献調査報告書. 2006年3月.

高温湿度環境下での身体活動時における生理的応答に関する研究ならびに厨房作業時生理的応答に関する文献調査を行い報告した。

学会発表 (シンポジウム)

**エネルギー消費量推定法に関する研究.** 吉武裕, 田中宏暁, 海老根直之, 島田美恵子, 引原有輝, 熊原秀晃, 綾部誠也, 西牟田守, 足立稔, 斉藤慎一. 第61回日本体力医学会. 2006年9月. 神戸. ヒトのエネルギー消費量の測定方法のゴールデンスタンダード法である二重標識水法やルームチャンバー法, また, 簡便法としての歩数計法, 加速度計法および心拍数法などについて, その特長やそれらを利用した最新の研究成果を紹介した。

学会発表 (一般発表)

**大学サッカー選手の体力測定・評価.** 宮森隆行, 吉村雅文, 綾部誠也, 宮原祐徹, 鈴木茂雄. 第4回日本フットボール学会. 2006年12月. 東京. 大学サッカー選手の身体組成ならびに身体作業能力を測定して, サッカーの競技能力との関連性を検討した。

**サッカー選手のミスに関する研究.** 鈴木茂雄, 吉村雅文, 宮森隆行, 綾部誠也, 宮原祐徹. 第4回日本フットボール学会. 2006年12月. 東京. サッカー選手の試合中のミスプレーを分析し, 大学生サッカー選手の自陣内でのクリアミスの1試合当たりの頻度がワールドカップ出場選手に比して高い事を明らかにした。

**大学サッカー選手における等速性膝関節トルクと20m疾走能力との関係.** 宮原祐徹, 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 鈴木茂雄, 内藤久土, 形本静夫, 吉村雅文. 第4回日本フットボール学会. 2006年12月. 東京. 大学サッカーMFポジションの選手において, 膝伸展トルクが20メートル疾走能力と正の相関関係にあることを明らかにした。

**VMAの有酸素性作業能評価法として有用性.** 綾部誠

也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 宮原祐徹, 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 第4回日本フットボール学会. 2006年12月. 東京. VMA テストがサッカー選手の有酸素作業能判定のフィールドテストとして妥当性が高いことを明らかにした.

**中強度身体活動パターンと有酸素性作業能, BMI および腹囲との関連性.** 綾部誠也, 形本静夫, 黒坂光寿, 熊原秀晃, 田中宏暁. 第27回日本肥満学会. 2006年10月. 兵庫. 中高強度身体活動時間の延長が, 有酸素性作業能の確保に有益であることを示した.

**中強度身体活動計 NL-1000の有用性.** 綾部誠也, 熊原秀晃, 森由香梨, 形本静夫, 内藤久士, 田中宏暁. 第61回日本体力医学会. 2006年9月. 神戸. 中強度身体活動計 NL-1000のトレッドミル歩行時の妥当性ならびにその着用が及ぼす効果について報告した.

**伸張性運動前の温熱処置のタイミングの違いが遅発性筋痛に及ぼす影響.** 佐賀典夫, 遠藤隆志, 小倉裕司, 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士. 第61回日本体力医学会. 2006年9月. 神戸. 温熱処置の効果は, そのタイミングが影響する可能性を示した.

**Age-associated declines for the physical activity pattern in relation to body mass index in seventh decade of life.** Ayabe M, Yoshitake Y, Tobina T, Miyazaki H, Shindo M and Tanaka H. Physical Activity + Obesity Satellite Conference International Congress on Obesity (ICO2006). 2006年9月. Brisbane. 高齢者における身体活動水準と体格指数の関連性について, 70歳代の男女の追跡調査から明らかにした.

**ウォームアップが伸張性運動後のスパイクジャンプ高に及ぼす影響.** 柿木亮, 内藤久士, 佐賀典生, 綾部誠也, 形本静夫. 第57回日本体育学会大会. 2006年8月. 青森. ウォームアップは, 筋痛の有無と無関係にスパイクジャンプ高を高めるものの, 筋痛の影響を軽減するまでに至らない可能性を示した.

**ダウンヒルスプリントランニング後に生じる遅発性筋痛の繰り返し効果の性差.** 第57回日本体育学会大会. 2006年8月. 青森. 長田朋樹, 佐賀典生, 形本静夫, 内

藤久士, 綾部誠也. ダウンヒルランニングに伴う筋痛の繰り返し効果には, 性差のある可能性を示した.

**パリスティックストレッチングが最大随意収縮力に及ぼす影響.** 宮原祐徹, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. 第57回日本体育学会大会. 2006年8月. 青森. パリスティックストレッチングは, 静的ストレッチングに比して, 柔軟性を同程度向上させ, 最大筋力の低下を抑制出来る.

**歩数計による中高強度身体活動時間の評価.** 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士, 熊原秀晃, 進藤宗洋, 田中宏暁. 第57回日本体育学会大会. 2006年8月. 青森. 歩数計を用いた中高強度身体活動時間の評価の妥当性を屋外走歩行ならびに日常身体活動時について検討した.

**Validity and reliability of the simple assessment of the time spent in moderate to vigorous intensity physical activity under the controlled conditions.** Ayabe M, Katamoto S, Kumahara H, Naito H, Shindo M and Tanaka H. 53rd American College of Sports Medicine Annual Meeting. 2006年5月. Colorado. NL-1000が評価した中高強度活動時間について, トレッドミルでの運動中における精度と再現性が良好であり, それらが, 性, 年齢および肥満度と無関係であることを報告した.

## 星本 正姫

〈学術論文〉

**心疾患患者における運動時の心肺機能と脳および骨格筋の酸素状態の関係.** 星本正姫, 小池 朗, 合田あゆみ, 長山 医, 田嶋明彦, 山口香織, 相沢忠範, 伊東春樹. 日本心臓リハビリテーション学会 11(1): 98-100, 2006. 2

**高血圧症患者の脳酸素状態に対するベニジピンの有用性.** 長山 医, 小池 朗, 伊東春樹, 星本正姫, 田嶋明彦, 山口香織, 合田あゆみ, 相沢忠範. セラビューティク・リサーチ 27(4): 715-18, 2006. 4

**職域での食事・運動療法およびFAXを用いた双方向の生活習慣修正プログラムの効果—高コレステロール血症への対策—.** 星本正姫, 小山良治, 小池 朗, 加藤祐

子, 丸山麻子, 中島宣行, 河合祥雄, 高山重光 日本臨床スポーツ医学会 14(3): 352-62, 2006. 8

**Critical level of cerebral oxygenation during exercise in patients with dilated cardiomyopathy.** Akira Koike, Masayo Hoshimoto, Akihiko Tajima, Osamu Nagayama, Kaori Yamaguchi, Ayumi Goda, Takeshi Yamashita, Koichi Sagara, Haruki Itoh, Tadanori Aizawa *Circulation Journal* 70(11): 1457-61, 2006. 11

〈学会発表〉

**End-tidal PCO<sub>2</sub> during Exercise Predicts Future Cardiovascular Events in Patients with Coronary Artery Disease.** Masayo Hoshimoto, Akira Koike, Ayumi Goda, Kaori Yamaguchi, Osamu Nagayama, Akihiko Tajima, Tadanori Aizawa *Circulation Journal* 70(S I): 499, 2006. 3

**Cerebral oxygenation is impaired during exercise in patients with left ventricular dysfunction.** Ayumi Goda, Akira Koike, Osamu Nagayama, Masayo Hoshimoto, Akihiko Tajima, Kaori Yamaguchi, Haruki Itoh, Tadanori Aizawa *Circulation Journal* 70(S I): 586, 2006. 3

**Prognostic Power of Heart Rate Recovery after Maximal Exercise Testing in Patients with Chronic Heart Disease.** Ayumi Goda, Akira Koike, Masayo Hoshimoto, Osamu Nagayama, Kaori Yamaguchi, Akihiko Tajima, Tadanori Aizawa *Circulation Journal* 70(S I): 184, 2006. 3

**Correlation of the severity of sleep apnea to cerebral hypoxemia and cardiac sympathetic stimulation in obstructive sleep apnea (OSA) patients.** Kaori Yamaguchi, Akira Koike, Ayumi Goda, Osamu Nagayama, Akihiko Tajima, Masayo Hoshimoto, Haruki Itoh, Tadanori Aizawa *Circulation Journal* 70(S I): 651, 2006. 3

**End-tidal PCO<sub>2</sub> during Exercise Predicts Future Cardiovascular Events in Patients with Coronary Artery Disease.** Masayo Hoshimoto, Akira Koike, Ayumi Goda, Kaori Yamaguchi, Osamu Nagayama, Akihiko Tajima, Tadanori Aizawa *Eur Heart J.* 27 (Suppl): 93, 2006. 9

**Critical level of cerebral oxygenation during exercise**

**in patients with dilated cardiomyopathy.** Masayo Hoshimoto, Akira Koike, Akihiko Tajima, Osamu Nagayama, Kaori Yamaguchi, Tomoko Maeda, Ayumi Goda, Tadanori Aizawa, Haruki Itoh *Eur Heart J.* 27 (Suppl): 98, 2006. 9

**Prognostic Power of Heart Rate Recovery after Maximal Exercise Testing in Patients with Chronic Heart Disease.** Ayumi Goda, Akira Koike, Masayo Hoshimoto, Osamu Nagayama, Kaori Yamaguchi, Akihiko Tajima, Tadanori Aizawa *Eur Heart J.* 27 (Suppl): 257, 2006. 9

糖尿病患者に対する教育的介入時のエゴグラムパターンの活用. 星本正姫, 河合祥雄, 野崎真道, 金塚 東, 中島宣行 体力科学 55(6): 791, 2006. 9

若年女性における「やせ」と運動習慣の違いが体力および骨密度に与える影響. 丸山麻子, 櫻庭景植, 星本正姫, 山田樹央, 高山重光 体力科学 55(6): 799, 2006. 9 “丸山麻子”の頁参照

一流陸上競技選手ならびに箱根駅伝選手の卒業後の健康状態. 加藤卓郎, 星本正姫, 河合祥雄, 仲村 明, 澤木啓弘. 体力科学 55(6): 853, 2006. 9 “加藤卓郎”の頁参照

高血圧症患者における FAX を用いた双方向の運動・食事療法が血圧に及ぼす影響. 星本正姫, 小山良治, 小池 朗, 加藤祐子, 丸山麻子, 河合祥雄, 高山重光 日本臨床スポーツ医学会 14(4), S109, 2006. 11

中村 恭子

〈論文〉

ダンスの学習内容と楽しさの検討—創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較— 著者: 中村恭子, 浦井孝夫 順天堂大学スポーツ健康科学研究 10, 65-70, 2006. 3

高校生300名余を対象に質問紙調査を実施し, 創作ダンスと現代的なリズムのダンスの学習内容と各種目の楽しさとの関係を分析した. 創作ダンスは「踊る」「創る」「観る」学習を通じ, 自己表現, 創意工夫, 主体的活動, 仲間との協力, 交流, 学習の達成感などの多面的な楽し

さや喜びをもたらしていた。現代的なリズムのダンスは「踊る」学習が中心で、踊る楽しさや技術習得の喜びなどももたらしていた。楽しさは学習意欲、ひいては学習成果に結びつきやすいことから、創作ダンスは運動技能のほか、学習態度や学び方の学習においても成果が期待できるが、現代的なリズムのダンスでは運動技能での成果に限られていることが示唆された。

**精神科デイケアにおけるプログラムの現状と課題** 著者：岩崎香，広沢正孝，中村恭子 順天堂大学スポーツ健康科学研究 10, 9-20, 2006. 3

岩崎香の項参照。

**ストリートダンスにおける胸部左右方向アイソレーション動作習熟過程の検討—熟練者と未熟練者の比較から—** 著者：豊本早也香，中村恭子 比較舞踊研究 12, 15-27, 2006. 3

ストリートダンスにおける胸部左右方向アイソレーション動作について熟練者と未熟練者の動きの違いを映像解析の手法を用いて分析し、その習熟過程を検討した。その結果、未熟練者に比べ熟練者は①左右肩峰の水平位置の保持、②左右移動距離の拡大、③音楽の拍子に合わせた速度変化（拍子に合わせた動作の強調）に特長が見られ、これらが胸部左右方向アイソレーション動作技術の要点であるとの知見を得た。

〈学会発表等〉

**精神科デイケア通所の統合失調症患者を対象としたダンスアクティビティの試み—気分の変化と症状評価に及ぼす影響について—** 発表者：中村恭子，広沢正孝，岩崎香，古川育美，井原裕（越谷病院），石井正紀（越谷病院）第49回日本病院・地域精神医学学会総会（東京）プログラム・抄録集，53, 2006. 6

精神科デイケア通所の統合失調症患者8名を対象に、運動プログラムのひとつとしてダンスアクティビティを4ヶ月間実施し、プログラム前後の不安気分の変化と医師の症状評価に及ぼす影響を検討した。その結果、8名全員の不安気分が改善され、6名の精神症状が改善されたほか、体力面や生活行動面においても改善が確認された者が多かった。これから、ダンスアクティビティが患者の気分や症状を改善させる可能性が示唆された。

学習成果から見たダンスの教材特性の検討—生徒の学

**習評価の観点から—** 発表者：中村恭子，浦井孝夫，日本体育学会第57回大会（弘前）予稿集，216, 2006. 8

創作ダンスと現代的なリズムのダンスの教材特性について生徒の学習成果から分析を試みた。中学生・高校生4000名余りを対象とした学習成果に関する質問紙調査40項目7件法の回答を因子分析した結果、運動目標としての「踊る」「創る」「観る」、社会的行動目標としての「協力交流」、情意目標としての「楽しさ」の5因子が抽出された。創作ダンスは「創る」「観る」「協力交流」の得点が高く、現代的なリズムのダンスは「楽しさ」の得点が高かった。また、全体に「観る」「協力交流」「楽しさ」の得点が高いことから、ダンスは運動技能習得の過程で社会的行動目標や情意目標についての成果を得やすい教材特性であるとの知見を得た。

〈専門誌〉

**音とからだ** 女子体育 48-1, 4-5, 2006. 1 単著

人は音（声）やからだの動きに感情を呼応させて表現しており、音声表現と身体表現は感性情報を共有していることから、感性豊かな「からだ」の育成における「音」の活用方法への配慮について述べた。

吉村 雅文

論文

**サッカーの戦術指導と効果：守備戦術トレーニングについて。** 吉村雅文，廣瀬伸良，越山賢一，青葉幸洋。スポーツ方法学研究 第19巻 第1号：67-80. 2006.

1年間実施された戦術トレーニングの効果が示唆された。

国際学会発表

**Effects of creatine supplementation on prolonged intermittent exercise in the heat.** Ishizaki, S, Naito, H, Katamoto, S, Yasumatsu, M, Inagaki, M, Yoshimura, M, Aoki, J. 11<sup>th</sup> ANNUAL CONGRESS OF THE EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE. 70: 2006.

国内学会発表

**大学サッカー選手における等速性膝関節トルクと20 m疾走能力との関係。** 宮原祐徹，綾部誠也，宮森隆之，今田英樹，黒坂寿，鈴木茂雄，内藤久士，形本静夫，吉村雅文。第4回日本フットボール学会：2006

大学サッカー選手の体力測定・評価. 宮森隆之, 吉村雅文, 綾部誠也, 鈴木茂雄, 形本静夫, 柳谷登志雄, 長尾雅史. 第4回日本フットボール学会: 2006

サッカー選手のミスに関する研究. 鈴木茂雄, 宮森隆之, 吉村雅文, 綾部誠也, 宮原祐徹. 第4回日本フットボール学会: 2006

VMAの有酸素性作業能評価法としての有用性. 綾部誠也, 宮原祐徹, 宮森隆之, 今田英樹, 黒坂寿, 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 第4回日本フットボール学会: 2006

教育大学スポーツ教育課程におけるスポーツ指導者養成モデルの報告: 地域サッカー指導者との連携. 越山賢一, 関朋昭, 吉村雅文. 北海道体育学会: 2006

## 宮森 隆行

学会発表

1. 大学サッカー選手の体力測定・評価. 宮森隆行, 吉村雅文, 綾部誠也, 長尾雅史 (医学部), 宮原祐徹, 鈴木茂雄, 柳谷登志雄, 形本静夫. 第4回日本フットボール学会抄録集 P: 58

要旨: 本研究は, 関東大学サッカー1部リーグ所属の男子部員を対象に, JFA フィジカル測定ガイドラインに従い体力測定を実施した. その結果全ての項目においてポジション別の有意差は認められなかった. 今後は個々の体力特性やポジション別特徴を考慮に入れたトレーニングを処方していくことが必要であることが示唆された.

2. VMAの有酸素性作業能評価法としての有用性. 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 宮原祐徹, 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 第4回日本フットボール学会抄録集 P: 57

要旨: 本研究は, 大学サッカー部に所属する部員を対象に OBLA (Onset of Blood Lactate Accumulation) と VMA (Velocity Maximum Speed) を測定した. その結果, OBLA と VMA の間に非常に高い相関性が認められた. 従って, VMA テストは OBLA を反映し, サッカー選手の有酸素性作業能の判定法として妥当であると考えられた.

3. 大学サッカー選手における等速性膝関節トルクと20 m 疾走能力との関係. 宮原祐徹, 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 鈴木茂雄, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 第4回日本フットボール学会抄録集 P: 46

要旨: 本研究は, 大学サッカー選手を対象に等速性膝関節トルクと, 20 m の疾走時間を5 m 間隔で測定した. その結果, 疾走の加速局面におけるスピードは膝伸展トルクと関連していることが示唆され, サッカー選手にとって重要なスプリント力は膝伸展トルクから推測することができると考えられた.

4. サッカー選手のミスに関する研究. 鈴木茂雄, 吉村雅文, 宮森隆行, 綾部誠也, 宮原祐徹. 第4回日本フットボール学会抄録集 P: 52

要旨: 本研究は, FIFA WORLD CUP GERMANY 2006の出場チーム及び関東大学サッカーリーグ1部リーグ所属チームを対象に, 事前に設定した7つの自陣内ミスの回数を測定した. その結果, クリアミスと, ヘディングクリアミス, リスタートにおいてWORLD CUP 出場チームと関東大学1部リーグ所属チームにおいて有意差が認められた.

## 廣津 信義

論文

Modeling tactical changes of formation in association football as a zero-sum game. N. Hirotsu, M. Wright. Journal of Quantitative Analysis in Sports, 2(2), Article 4, 1-20.

サッカーの試合でのフォーメーション変更策について, ゲーム理論の観点から零和ゲームとして定式化し最適な変更策などを例示した.

ハンドボールへのマルコフモデルの適用. 上田徹, 佐藤啓, 廣津信義. オペレーションズ・リサーチ, 51(6), 340-345.

ハンドボールのプレーの流れをマルコフ連鎖としてモデル化し, 日本ハンドボールリーグなどの実データに基づき期待得点などを計算した.

サッカー選手のDEAの視点からの評価. 廣津信義, 秋山大輔, 上田徹. オペレーションズ・リサーチ, 51

(10), 655-661.

DEA (経営効率分析法) の手法を J1 選手の評価に適用し, 選手の効率性を導出するとともに, オプタポイントによる評価法と比較分析した.

#### 国際学会発表

**Modelling tactical changes of formation in association football as a zero-sum game.** N. Hirotsu, M. Wright. 21st European Conference on Operational Research (Reykjavik). 平成18年7月4日. Final Programme, 154 (2006).

**Modeling tactical changes of formation as a non-zero-sum game in soccer.** N. Hirotsu, C. Miyaji. INFORMS (Institute for Operations Research and the Management Sciences) Annual Meeting 2006 (Pittsburgh). 平成18年11月5日. Book of abstract, 107 (2006).

#### 国内学会発表

サッカーにおける布陣変更策の非零和ゲームとしてのモデル化. 廣津信義, 宮地力. 2006年日本OR学会春季研究発表会 (東京). 平成18年3月15日. アブストラクト集, 196-197 (2006).

レセプションアタックに着目したバレーボールのゲーム理論的分析. 廣津信義, 伊藤雅充, 宮地力, 田口東. 日本体育学会57回大会 (弘前). 平成18年8月20日. 予稿集, 193 (2006).

バレーボールにおける戦術の駆け引きへのゲーム理論の適用の試み. 廣津信義, 柏木達也, 伊藤雅充, 宮地力, 田口東. 2006年日本OR学会秋季研究発表会 (名古屋). 平成18年9月13日. アブストラクト集, 276-277 (2006).

#### その他

「スポーツとモデリング」特集にあたって. 廣津信義. オペレーションズ・リサーチ, 51(6), 318.

オペレーションズ・リサーチのスポーツへの応用研究の最近の動向とスポーツの数理モデル化に関する特集論文6編について紹介した.

## 河合 祥雄

### 原著

上野めぐみ, 河合祥雄, 三野大來, 鴨下 博 本邦における在宅生活高齢者の転倒関連因子についての Systematic Review (メタアナリシス手法を用いて) 2006年1月25日 日本老年医学会雑誌 43(1): 92-101, 2006

星本正姫, 小山良治, 小池朗, 加藤祐子, 丸山麻子, 中島宣行, 河合祥雄, 高山重光 職域での食事・運動療法およびFAXを用いた双方向の生活習慣修正プログラムの効果—高コレステロール血症への対策—. 日本臨床スポーツ医学会誌 14(3): 352-62, 2006.

### 著書

河合祥雄 全身疾患による心筋疾患 (松崎益徳, 吉川純一編集 臨床心臓病学) 松崎益徳, 吉川純一編集 臨床心臓病学, 文光堂, 2006年3月, 東京, 382-384

河合祥雄 運動療法・運動処方のための診断書・意見書 井上一, 武藤芳照, 福田潤編著「改訂第4版 運動療法ガイド 正しい運動処方を求めて」日本醫事新報社, 2006年8月10日, 東京, 164-172.

河合祥雄 急死・突然死 (心臓性急死) 総編集; 金澤一郎, 北原光夫, 山口徹, 小俣政男「内科学I」医学書院, 東京, 673-675.

河合祥雄 川崎病(急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群) 総編集 金澤一郎, 北原光夫, 山口徹, 小俣政男「内科学I」, 医学書院, 東京, 平成18年10月, 826-829

### 総説

山田京志, 河合祥雄 たこつぼ心筋症の成因と診断 2006年1月10日 Cardiac Practice 17(1): 59-64, 2006

### 症例報告論文

吉村雅利, 新田順一, 丹羽明博, 瀧和博, 鈴木宏昌, 河合祥雄, 磯部光章 心筋炎所見を示す不整脈源性右室心筋症の1例 心臓 38: 1025-1030, 2006

富永恵子, 蔵野亘之, 松井瑠璃, 内山晃, 熊田聡子,

倉田清子, 新井信隆, 林雅晴, 河合祥雄 発熱と呼吸困難にて発症, 急性心不全で死亡し, 剖検にて克山病様心筋症と診断された1剖検例. 日本重症心身障害学雑誌 31(3): 311-315, 2006.

#### 報告

加納樹里, 佐藤清貴, 阿部記子, 里見潤, 坂本剛健, 河合祥雄 心拍変動・散布図の利用に関する基礎的研究 第14回日本運動生理学会大会, 広島大学東広島キャンパス 渡部和彦会長, 2006. 7. 30

加藤卓郎, 星本正姫, 河合祥雄, 仲村明, 澤木啓祐 一流陸上競技選手ならびに箱根駅伝選手の卒業後の健康状態 第61回日本体力医学会大会, 神戸国際会議場 2006. 9. 25

星本正姫, 河合祥雄, 野崎真道, 金塚東, 中島宣行 糖尿病患者に対する教育的介入時のエゴグラムパターンの活用 第61回日本体力医学会大会, 神戸国際会議場 2006. 9. 25

山田京志, 河合祥雄, 鈴木宏昌, 代田浩之 たこつぼ型心筋障害の病理組織学的検討 第54回心臓病学会, 座長: 布田伸一 2006. 9. 25

星本正姫, 小山良治, 小池朗, 加藤祐子, 丸山麻子, 河合祥雄, 高山重光 高血圧患者におけるFAXを用いた双方向の運動・食事療法が血圧に及ぼす影響 日本臨床スポーツ医学会誌 14(4): S109, 2006. 第17回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 荒川正昭会長, 座長渡辺健寛

河合祥雄 たこつぼ心筋症の病理 第23回ベイエリアハートカンファレンス(大阪湾岸心臓会議) ホテルグランヴィア大阪 20F『名庭の間』座長: 野原隆司 2006. 10. 28

山田京志, 河合祥雄, 鈴木宏昌 たこつぼ型心筋障害における心血管病変の病理組織学的検討. 第28回心筋生検研究会, 大阪医科大学新講義実習棟, 会長北浦泰, 座長河合祥雄中村浩士, 2006. 11. 25

#### 講演

河合祥雄 たこつぼ心筋障害(たこつぼ心筋症) 単平成18年1月13日 平成17年度細胞病理利用者発表会 座長栗原秀剛, 順天堂大学10号館5階カンファレンスルーム

河合祥雄 中高年の運動の際の注意点-突然死しない/させないためのチェックポイント 2006年2月6日 20回スポーツ医学研究会, 座長いわき総合警成共立病院 整形外科部長 相澤利武, 報徳苑, いわき市

河合祥雄 特発性拡張型(うっ血型)心筋症の治療と日常生活 2006年3月18日 難病講演会(難病療養相談事業), 江東区城東保険相談所, 城東保険相談所1階講堂

河合祥雄 スポーツ指導者に必要な医学的知識 2006. 6. 24 平成18年度千葉県スポーツプログラマー等養成講習会, 千葉県総合スポーツセンター, スポーツ科学センター, 平成18年6月24日, 千葉県教育庁教育振興部体育課スポーツ振興室

河合祥雄 メディカルチェック1 平成18年度千葉県健康生活コーディネーター育成研修カリキュラム, 千葉県教育会館 新館501, 千葉県健康福祉部長 山口忠則 2006, 7, 18

河合祥雄 メディカルチェック2 平成18年度千葉県健康生活コーディネーター育成研修カリキュラム, 千葉県教育会館 新館501, 千葉県健康福祉部長 山口忠則 2006, 7, 18

河合祥雄 健康づくりのための考え方~健康千葉21から~. 平成18年度健康づくり講座, 千葉県教育委員会, 千葉県総合スポーツセンター内スポーツ科学センター 2006. 8. 26

#### 加藤 卓郎

一流陸上競技選手ならびに箱根駅伝選手の卒業後の健康状態 (連名者: 星本正姫, 河合祥雄, 仲村明, 澤木啓祐) 体力科学 55(6): 853, 2006

陸上競技選手トップアスリートならびに箱根駅伝選手



の学生時代に形成された食習慣や高強度のトレーニング習慣が、中年期のライフスタイルおよび健康状態にいかなる関連にあるのかを検討することを目的とした。運動習慣群は有意に飲酒率が高く、その結果、肝機能障害の罹患率が高い傾向にあることが明らかになった。また、心臓病罹患率は高強度鍛錬群が高く、運動習慣がなくなると発症率はさらに高くなる傾向にあると示された。

## 卯田 一平

(研究資料)

長距離走におけるレース前のスピード刺激練習に関する研究：卯田一平・吉儀 宏・澤木啓祐，陸上競技研究第65号：22-27 (2006. 6)

長距離走を専門とする競技者を対象として、スピード刺激練習の実施方法の差異が競技成績に及ぼす影響について検討した。実施日をタイムトライアル1日前と2日前の2通りとし、競技成績を比較したが、有意な差はみられなかった。また、走スピードをレースペースの100%と105%の2通りとし、競技成績を比較したが、有意な差はみられなかった。以上の結果から、スピード刺激練習は各競技者に応じた内容で行うことが重要であると考えられた。

## 澤木 啓祐

長距離走におけるレース前のスピード刺激練習に関する研究：卯田一平，吉儀 宏，澤木啓祐，陸上競技研究65: 22-27 (2006)

卯田の項参照

(学会発表)

高地トレーニングが血液レオロジーに与える影響：仲村 明，鯉川なつえ，澤木啓祐，日本陸上競技学会第5回大会抄録集：34 (2006. 9)

鯉川の項参照

走運動負荷後の小麦グルテン加水分解物(WGH)投与による組織障害抑制の効果：鯉川なつえ，鈴木良雄，仲村 明，上田誠仁，川崎勇二，吉儀 宏，長岡 功，澤木啓祐，体力科学：55(6)：704 (2006. 9)

鯉川の項参照

高地トレーニング時におけるウォーターローディングが血液流動性に与える影響：鯉川なつえ，仲村 明，澤木啓祐，第13回日本ヘモレオロジー学会プログラム抄録集：46 (2006. 11)

鯉川の項参照

(特別講演)

トップアスリートに診る身体づくり・健康作り：静岡メディカルフォーラム—健康とスポーツ—，三島市(2006. 9)

長距離ランナーに観る記録の向上と科学的アプローチ：第61回日本体力医学会大会，神戸市 (2006. 9)

スポーツイベントでブランド構築：大阪ブランドサミット，大阪市 (2006. 10)

## 鯉川なつえ

(資料，報告書)

ストラトグラムからみた駅伝選手の自己分析：仲村明，鯉川なつえ，青木和浩，須田柳治 東京体育学研究2005年度報告：21～24，2006. 1

駅伝選手を対象にストラトグラムを用いて3つの脳のタイプに分類し、競技能力や男女の違いから駅伝選手の自己分析を報告した。

スポーツ観戦における性差～箱根駅伝の魅力に関するアンケート調査より～：平田きみ子，鯉川なつえ，陸上競技研究第66(3)：49-53 (2006. 9)

箱根駅伝の魅力に関するアンケート調査を実施し、スポーツ観戦における性差を検討した結果、男性は選手と自分を重ね合わせながら観戦するのに対し、女性は仲間同士の絆や繋がり的魅力を感じながら観戦する傾向があることが示唆された。

(学会発表)

高地トレーニングが血液レオロジーに与える影響：仲村 明，鯉川なつえ，澤木啓祐，日本陸上競技学会第5回大会抄録集：34 (2006. 9)

長距離ランナーを対象に短期高地トレーニングを実施し、その前後の血液状態と血液流動性から、低酸素環境下における水分喪失および脱水に関する基礎的データを

観察した。その結果、高地トレーニング前に比べRBC, Hctが有意に増加し、全血通過時間は、高地トレーニング後に有意に延長した。以上のことから、短期高地トレーニングによって、酸素運搬能に関する血液生化学データが改善されたが、血液粘性が高まることが明らかとなった。

**女子長距離ランナーのエストロゲン分泌動態に関する研究**：鯉川なつえ，宮崎亮一郎，日本陸上競技学会第5回大会抄録集：35 (2006. 9)

女子長距離ランナーを対象に、正常月経ランナー、月経異常ランナーおよびホルモン剤服用ランナーのエストロゲン分泌動態等について事例的に調査することを目的とした。その結果、月経異常ランナーは基準値よりも著しくエストロゲンの分泌が低値であり、正常月経ランナーのエストロゲン値との間に有意差が認められた。しかし、正常月経ランナーのエストロゲン値もまた基準値を下回っていた。以上のことから、女子長距離ランナーは、全般的にエストロゲンの分泌が低いことが明らかとなった。

**走運動負荷後の小麦グルテン加水分解物 (WGH) 投与による組織障害抑制の効果**：鯉川なつえ，鈴木良雄，仲村 明，上田誠仁，川崎勇二，吉儀 宏，長岡 功，澤木啓祐，体力科学 55(6): 704 (2006. 9)

男子学生ランナーを対象に走運動負荷後に小麦たん白加水分解物、以下WGH)を10g, 20g投与およびControl群にわけ、24時間後、48時間後のCPKにより評価した結果、運動前および運動1時間後のCPK値は各群間で差はみとめられなかったが、運動24時間後のCPK値はControl群に比べWGH 20g群において有意に低下した。またレース48時間後のCPK値は、Control群に比べGP 20g群において低下傾向がみられ、走運動後のWGH 20gの投与は24時間後の筋組織障害を抑制する効果があると結論した。

**スポーツ系大学女子の納豆摂取状況と月経随伴症状に関する研究**：柳田美子，鯉川なつえ，栄養学雑誌 64(5): 442 (2006. 10)

柳田の項参照

**高地トレーニング時におけるウォーターローディングが血液流動性に与える影響**：鯉川なつえ，仲村 明，澤

木啓祐，第13回日本ヘモレオロジー学会プログラム抄録集：46 (2006. 11)

長距離ランナーの高地滞在中に、適正なウォーターローディングプログラム群 (Water群) と水を自由に摂取する群 (Control群) で、血液データおよび血液レオロジーがどのように変化するかを検討した結果、Water群、Control群ともに高地トレーニング後において、RBC, Hgb, Hct および血小板が有意に増加し、Control群はNa, Clが有意に低下した。また、血液通過時間は両群の間に有意な差は認められなかったが、Water群に比べControl群の方が延長する傾向がみられ、高地滞在中にウォーターローディングを実践することで、血液流動性を改善させ、高地トレーニング効果を高める可能性が示唆された。

## 井上 忠夫

学会発表

**女子学生の冷え性と生活習慣に関する疫学的検討研究**者：土屋 基，井上忠夫，鈴木勝彦，荒賀直子 (医療看護学部)，樋口和洋 (信州短期大学) 民族衛生，第79巻付録，第71回日本民族衛生学会総会講演集，2006年11月，56-57頁“土屋基の項参照”

著書

**キャンプのものさし—野外教育活動を評価するための尺度集** 著者：井上忠夫，大石示朗 (東京女子体育大学)，岡村泰斗 (筑波大学)，坂本昭裕 (筑波大学)，多田 聡 (明治大学)，築山泰典 (京都YMCA)，西田順一 (福岡大学)，張本文昭 (てい〜だキッズミュージアム)，平野吉直 (信州大学)：32-35頁，社団法人日本キャンプ協会，2006年3月

本書は、これまでキャンプの評価は、ともすれば指導者の主観に頼ることが多かった面を一定の基準となる「ものさし」を作成し、測ることが難しいと考えられがちな心理的、社会的側面の教育効果を測るアンケートを中心に作成した。キャンプ中の参加者の疲労度を確認するにはどのような方法がありますか？ の部分を担当した。

## 鈴木 大地

著書

1. 保健衛生と健康スポーツ科学 監修 稲葉裕 篠原出版新社 第7章「健康と水泳」担当 P148-167

論文

1. グローバル・メディア・イベントとしてのスポーツ——スポーツスターの『自己創造』に関するエスノグラフィー 高橋利枝, 鈴木大地 順天堂大学スポーツ健康科学紀要 2006. 10 P43-49 (報告)

2. 健康関連イベント参加者の生活習慣と健康状態に関する研究——水中運動の影響を中心に——鈴木大地, 松葉剛, 稲葉裕, 白石安男 順天堂医学 2006. 52 P415-426 (原著)

原稿

1. 世界 OWS 選手権に参加して 鈴木大地 月刊水泳 勸日本水泳連盟 2006. 10 P34-35

2. 国際大会 review 鈴木大地 スイミングマガジン ベースボールマガジン社 2006. 11 P64-65

学会発表

1. 「求められスポーツドクターとは？」鈴木大地 第32回日本整形外科学スポーツ医学会シンポジウム

2. 「タイ国駐在邦人の運動習慣とストレス」松葉剛, 鈴木大地, 稲葉裕 第65回日本公衆衛生学会

## 岩井 秀明

[国際学会発表]

1. **PROTEOMIC ANALYSIS OF 6-NITROTRYPTOPHAN-CONTAINING PROTEINS IN PEROXYNITRITE-TREATED PC12 CELLS** Authors: Keiichi Ikeda, Hideaki Iwai, Takashi Matsumoto, Reiko Mineki, Hikari Taka, Kenji Takamori, Hideoki Ogawa and Fumiyuki Yamakura 11th Meeting of the International Study Group of Tryptophan Research—2006 (ISTRY-2006 Tokyo) Tokyo, Japan (Program and Abstract: P22) 2006. 7

要旨：神経様細胞へ活性窒素種を作用させることにより、神経の炎症による酸化傷害のモデルを作成し、6-ニトロトリプトファンを含むタンパク質についてプロテオーム解析を行い、ストレス応答、エネルギー代謝、タンパク質合成に関わるタンパク質などを同定した。

[国内学会・研究会発表]

1. パーオキシナイトライト処理 PC12 細胞における

6-ニトロトリプトファン免疫反応タンパク質の同定 著者：池田啓一, 岩井秀明, 松本孝, 峯木礼子, 高ひかり, 高森建二, 山倉文幸 第6回日本 NO 学会学術集会, 東京, (プログラム・抄録集：P. 85) 2006. 5

要旨：パーオキシナイトライト処理 PC12 細胞中に存在する、6-ニトロトリプトファン免疫反応タンパク質の同定を行い、7種のトリプトファンニトロ化タンパク質が確認された。

2. **血液中銅・ヒスチジン錯体及び Cu, Zn-Superoxide Dismutase による過酸化脂質生成の抑制** 著者：井上節子, 中島滋, 信太直己, 雨宮有子, 池田啓一, 山倉文幸, 岩井秀明 第17回日本微量元素学会, 静岡 (Biomed, Res, Trace Elements: 17(2), L47) 2006. 7

要旨：7名の女子学生を対象に運動の前後で血液中銅、ヒスチジン錯体、Cu, Zn-Superoxide Dismutase, 過酸化脂質を測定した。運動前の結果では銅及びヒスチジンの多い学生は過酸化脂質が抑制されていたが、運動後の結果では逆転の傾向が見られた。

3. **ストレス効果指標等による癒し効果の評価** 著者：雨宮有子, 信太直己, 佐々木希, 後藤千晶, 岩井秀明 第16回体力栄養免疫学会, 東京 2006. 8

要旨：唾液中アミラーゼ活性及びバイタルサインズの癒し効果、健康商品の抗酸化能について調べた。唾液中アミラーゼ活性についてはいくつかの健康法、健康商品について活性の低下が見られた。

4. **HPLC-電気化学検出器によるヒト血清中6-ニトロトリプトファンの検出** 著者：嶋田武, 池田啓一, 岩井秀明, 信太直己, 加納達二, 松田繁, 河合祥雄, 形本静夫, 山倉文幸 第4回日本予防医学会学術総会, 埼玉 (要旨集：P. 66) 2006. 12

要旨：健康人における冠動脈系疾患予防における健康の指標とすることを目的とし、ヒト血清中の6-ニトロトリプトファンの新しい分析法を開発した。

5. **加齢と免疫機能の関係** 著者：信太直己, 趙譚, 雨宮有子, 岩井秀明, 町田和彦 第75回日本衛生学会総会, 山口 (日本衛生学雑誌：61(2) P. 277) 2006. 3

要旨：信太の項参照

6. **歩行と身体機能の関連—中国天津での調査—** 著

者：信太直己，小川奈美子，片山佳代子，岩井秀明，雨宮有子，町田和彦 第16回体力栄養免疫学会，東京 2006. 8

要旨：信太の項参照

## 信太 直己

[国際学会発表]

1. **Identification of immunoreactive proteins in ONOO<sup>-</sup>-treated PC12 cells by using affinity-purified anti-6-nitrotryptophan antibody** Authors: Keiichi Ikeda, Yukihiko Hiraoka, Hideaki Iwai, Takashi Matsumoto, Reiko Mineki, Hikari Taka, Naoki Shida, Kenji Takamori, Daijiro Ohmori, Fumiyuki Yamakura 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress, Kyoto, Japan, 2006. 6

要旨：岩井の項参照

[国内学会・研究会発表]

1. **加齢と免疫機能の関係** 連名者：信太直己，趙譚，雨宮有子，岩井秀明，町田和彦 第75回日本衛生学会総会，山口 2006. 3

要旨：免疫機能が加齢とともにどのような変化をするのかをラットを用いた動物実験で調べた。好中球，リンパ球機能は壮年期が最も高い，NK細胞機能は幼年期と壮年期で差はないが老年期では低下，マクロファージ機能は年齢が上がるに従い低下するという結果になった。

2. **歩行と身体機能の関連—中国天津での調査—** 連名者：信太直己，小川奈美子，片山佳代子，岩井秀明，雨宮有子，町田和彦 第16回体力栄養免疫学会，東京 2006. 8

要旨：日々の歩行が身体にどのような影響を及ぼすのかを中国天津での調査をもとに調べた。その結果，1日の歩行数が多いほど長座位体前屈，10 M歩行の記録が高く，またBMIが25以上の肥満群は非肥満群と比べ歩行数が少なかった。

3. **血液中銅・ヒスチジン錯体及びCu, Zn-Superoxide Dismutaseによる過酸化脂質生成の抑制** 著者：井上節子，中島滋，信太直己，雨宮有子，池田啓一，山倉文幸，岩井秀明 第17回日本微量元素学会，静岡 2006. 7

要旨：岩井の項参照

4. **ストレス効果指標等による癒し効果の評価** 連名者：雨宮有子，信太直己，佐々木希，後藤千晶，岩井秀明 第16回体力栄養免疫学会，東京 2006. 8

要旨：岩井の項参照

5. **HPLC-電気化学検出器によるヒト血清中6-ニトロトリプトファンの検出** 著者：嶋田武，池田啓一，岩井秀明，信太直己，加納達二，松田繁，河合祥雄，形本静夫，山倉文幸 第4回日本予防医学学会学術総会，埼玉，2006. 12

要旨：岩井の項参照

## 細見 修

[原著論文]

1. A. Takeya, O. Hosomi, H. Nishijima, Y. Ohe, K. Sugahara, M. Sagi, K. Yamazaki, H. Hayakawa, H. Takeshita, C. Sasaki, T. Kogure, T. Mukai **Presence of  $\beta$ -linked GalNAc residues on N-glycans of human thyroglobulin** Life Science, 16; 80(6) 538-45, 2007.

Hepatic asialoglycoprotein receptor, which may mediate the clearance of circulating thyroglobulin, is known to have a high affinity for GalNAc. Recently, the receptor has been reported to be present also in the thyroid, implicating interaction with thyroglobulin. Here, mammalian thyroglobulins were analyzed for GalNAc termini by Western blotting with GalNAc-recognizing lectins labeled with peroxidase or <sup>125</sup>I. Wistaria floribunda lectin was found to bind human thyroglobulin and, to some extent, bovine, but not porcine thyroglobulin. After desialylation, the lectin bound all of the thyroglobulins tested. The binding was inhibited by competitive inhibitor GalNAc. Peptide N-glycanase treatment of human desialylated thyroglobulin resulted in the complete loss of reactivity with W. floribunda lectin, indicating that the binding sites are exclusively on N-glycans. The binding sites on human desialylated thyroglobulin were partly sensitive to beta-galactosidase, and the remainder was essentially sensitive to beta-N-acetylhexosaminidase. On the other hand, the binding sites of bovine and porcine desialylated thyroglobulins were totally sensitive to beta-galactosidase. Thus the lectin binds beta-Gal termini, as

well as beta-GalNAc. GalNAc-specific Dolichos biflorus lectin also bound human thyroglobulin weakly. In contrast to *W. floribunda* lectin, desialylation diminished binding, suggesting that these two lectins recognize different GalNAc-terminated structures. Again, the binding was inhibited by GalNAc and by treatment with peptide N-glycanase. These results strongly indicate the presence of distinct GalNAc termini of N-glycans on human thyroglobulin.

#### 【学会発表】

1. K. Hayashi, S. Niizato, K. Uehara, Y. Misawa, N. Uzuka, Y. Matahira, O. Hosomi **Research on the yogurt produced with the cow milk in which glucosamine (GlcNH<sub>2</sub>) is added** Chitin Chitosan Res., 12(2), 217, 2006.

Five volunteers take a cup of yogurt (100 g/day) every day, and we examine its safety and effect on joints. A man (50 generations) takes it for about six months, and a pain of wrist and ankle is considerably improved. Other volunteers (20~22 years old men) also take the same yogurt for three months, and their pains, such a joint have been gradually improved.

2. N. Ando, Y. Sato, S. Ibe, Y. Misawa, N. Uzuka, Y. Matahira, O. Hosomi **Study on the safety of novel oligosaccharide containing glucosamine** Chitin Chitosan Res., 11(2), 218, 2006.

We hope that the safety of a novel oligosaccharide can be confirmed through its ingestion experiment by comparing with control groups about biochemical tests of blood at the end of the experiment. Up to today, mice are healthy and have a good appetite. And their weight is on the increase irrespective of group.

3. O. Hosomi, Y. Misawa, A. Takeya, N. Uzuka, Y. Matahira, D. Ohmori, K. Ikeda, S. Kudo **Study on the receptor molecule of melibiosamine which has suppressive effect on cancer cell (K562, BALL) proliferation** Chitin Chitosan Res., 11(2), 148-149, 2006.

Using glucosamine, N-acetylglucosamine and lactose, we have synthesized some novel oligosaccharides by the reverse reactions of  $\alpha$ - and  $\beta$ -galactosidase reactions. A few of oligosaccharides which had glucosamine residue at reducing

terminal inhibited cell proliferation of human leukemia (K562 and BALL). However, we had not been able to identify the receptor (or binding) molecule of oligosaccharide (s). In this study we detected a candidate of the melibiosamine (MelNH<sub>2</sub>, Gal $\alpha$ 1-6GlcNH<sub>2</sub>)-binding protein by the combination of affinity chromatography, SDS-PAGE and LC/MS/MS analysis. The eluted 31 kDa-protein might be heterogenous nuclear ribonucleoprotein A1 isoform (human hnRNP A1 isoform, m.w. 30,903). But the human hnRNP A1 molecule might locate in cell nuclear. Thus we should elucidate the precise location of MelNH<sub>2</sub>-binding protein in human cell.

4. A. Takeya, O. Hosomi, H. Nishijima, Y. Ohe, K. Sugahara, M. Sagi, K. Yamazaki, H. Hayakawa, H. Takeshita, C. Sasaki, T. Kogure, T. Mukai, Jpn. J. Legal Med., 60(1) 2006 「サイログロブリンの *Dolichos biflorus* レクチン反応性とレクチン結合部位の性状」

ヒトのサイログロブリン (Tg) には GalNAc 結合性 *Dolichos biflorus* レクチン (DBL) が結合し、ウシやブタの Tg には結合し難いことを報告した。更に、ヒトの Tg に糖分解酵素を作用させて、レクチン結合部位の性状を調べた。その結果、トリ肝臓由来の  $\alpha$ N アセチルガラクトサミニダーゼや Jack bean の  $\beta$ N アセチルヘキソサミニダーゼでは結合性は影響を受けなかったが、シアリダーゼ処理では結合性の減弱が見られた。このことから、ヒト Tg 糖蛋白質の糖鎖末端には  $\alpha$ GalNAc 残基の近傍にシアル酸が存在して、レクチンとの結合性を強めていると考えられた。

#### 【著書】

1. 細見修 「ガン細胞の増殖を阻害するメリビオサミンの作用機序に迫る」 「健康ジャーナル」 特別号 Part 16, 10-14, 2006.

これまでの研究によって、オリゴ糖の一種であるメリビオサミン (Gal $\alpha$ 1-6GlcNH<sub>2</sub>) が、ヒトの白血病由来細胞である K562 細胞の増殖を強力に抑制することが明らかになってきた。しかし、この新しいオリゴ糖がガン細胞にどのように取り込まれ、どのようなメカニズムでガン細胞に致命的な打撃を与え、細胞死(アポトーシス)を誘導するのか等の謎を解明するにはまだ課題が多く残されている。著者等はガン細胞からある特殊の蛋白質を取り出し、LC/MS/MS で解析した結果、リボ核蛋白質

(hnRNP A-1) の一種であることが明らかになった。この蛋白質は、ガン細胞では活性化されているテロメラーゼの働きを調整する働きを持っているが、オリゴ糖がそれを阻害するのではないかと考えた。また、糖を結合する蛋白質であるガレクチンファミリーの中に、mRNA の成熟 (スプライシング) 作用を有する分子があり、この働きがオリゴ糖によって阻害される可能性を示唆した。

## 田中 純夫

### 〈論文〉

中学生の攻撃性と学校適応との関連—中学生用機能的攻撃性尺度 (FAS) の作成を通して— 田中純夫・山田泰行・杉浦幸・菊地奈美・今野亮・水野基樹, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第10号 pp50-58 2006

認知的決定過程から非行・犯罪者の攻撃性を捉えるために開発された FAS を一般の中学生の攻撃性を構造的に把握できるようカテゴリと項目内容を精選し、再構成した。また、この尺度が実際の生徒の学校適応状況をどのように説明できるか、またストレスコーピングの方法とどのように関連しているかを検討した。

運動選手の用いるストレスコーピングの共通性に関する研究—性差と競技特性に着目して—, 山田泰行・中島宣行・廣澤正孝・田中純夫・水野基樹・杉浦幸, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第10号 pp21-28 2006

競技特性と性別の違いから、選手の採用するコーピングを把握するとともに、それぞれのコーピングが抑うつ反応の抑制にどの程度有効であるかについて明らかにする。選手の用いるコーピングの中には性差と競技特性によって決定されているものが存在し、またコーピングと抑うつ得点との相関では、競技間や性差間において採用されるコーピングに共通性があることが確認された。

救急救命士の職務ストレスと健康状態に関する研究, 水野基樹・山田泰行・石井杏奈・田中純夫, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第10号 pp1-8 2006

多くの制約を抱え過酷な労働条件の下で、重要な使命を果たしている救急救命士のモチベーションの発生要因としての職務ストレスと健康状態について考察した。救急救命士のストレス低減には「時間・ゆとり」、また健康状態については「職場の良好な人間関係」がストレス抑制要因として機能している。

**A human resource management approach to motivation and job stress in paramedics** Motoki Mizuno, Yasuyuki Yamada, Anna Ishii, Sumio Tanaka, Evidence-Based Occupational Health pp167-170 2006, The motivation and job stress

Motivation and job stress in paramedics related to several complex constructs of the job satisfaction and the confident variables. Time factors decrease the stress of paramedics positively and human relations at work as co-workers influence the health conditions. A great concern has been raised in the business organization and particularly among factory workers.

### 〈学会発表〉

バス乗客の転倒注意と Locus of Control に関する研究, 杉浦 幸・山田泰行・柳谷登志雄・田中純夫・水野有希・水野基樹, 2006年度第41回人類労働学会講演集 pp42-43 2006

バスの急停車や衝突による被害の増加に伴い、乗客に対する転倒注意を喚起・促進する要因として、バス転倒事故に対する「統制の所在 (Locus of Control: LOC)」に着目し、乗客の転倒注意と LOC の関連について明らかにした。

バス運転手の安全運転業務を妨げる心理的要因, 山田泰行・杉浦 幸・柳谷登志雄・田中純夫・水野有希・水野基樹, 2006年度第41回人類労働学会講演集 pp44-45 2006

バスの安全運転を妨げる運転手のストレス反応を明確化し、車内事故の予防に資することを目的とし、また、それらのストレス反応との関連が予想される要因としての職務ストレスと他者からの承認にも着目して検討を加えた。

相談業務従事者の労働環境と職務ストレス, 川田裕次郎・田中純夫・菊地未起子・水野基樹, 産業保健人間工学会誌第8号特別号 (産業保健人間工学第11回大会抄録集) pp105-108 2006

相談業務従事者にとって良好な職場のシステムを創造すること、また、クライアントのさまざまなニーズに応え、現代社会に生じる心理的な諸問題を解決することを目的として相談業務従事者の労働環境とストレスとの関係を検討した。相談業務従事者のストレスはかなり高

く、職場内のサポート体制の充実、そして守秘義務等の職務の特殊性からも専門職によるスーパーバイザー制度の充実が不可欠であるという結果となった。

**体育系大学の女子新入生における摂食問題—月経・性格傾向との関連—**杉浦 幸・広沢正孝・田中純夫・中島宣行・水野基樹, 産業保健人間工学会誌 第8号特別号(産業保健人間工学会第11回大会抄録) pp113-11 2006

アスリートの摂食異常(DE)の予防を目的として、好発期を明らかにし、また競技スポーツという集団特性を理解した上で、摂食障害に親和的な性格傾向を明らかにする。体育系大学の女子新入生に対し、摂食態度、月経状態を調査し大学入学時までにおける実態調査を行い、その結果として、新入生の時点でのDEの発現率は一般人と同程度であり、大学入学後に上昇する可能性があることが示唆された。

**中学生における反応的攻撃性に関する要因Ⅰ—認知的側面との関連—**田中純夫・山田泰行・杉浦 幸・菊地奈美・水野基樹, 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 2006 pp660

現代の青少年の問題行動の中でも“キレル”攻撃行動への対応が急務になっていることを踏まえ、濱口らが作成した“反応的攻撃性尺度”を再構成した。反応性攻撃性の高い子どもは思春期以降の抑うつ症状との関連も指摘されており、本研究では中学生を対象として攻撃性と認知的側面との関連を明らかにした。

**中学生における反応的攻撃性に関する要因Ⅱ—感情的側面との関連—**山田泰行・杉浦 幸・菊地奈美・水野基樹・田中純夫, 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 2006 pp661

中学生の反応的攻撃性に関連する要因として、希望の無さ、抑うつ、疲労、孤独感、自尊感情といった感情的側面に着目し、それらの影響を明らかにすることで教育的介入の視点を見出すことを目的とした。反応的攻撃性の抑制を目標として生徒に介入する場合、自尊感情の育成だけでは対人場面での攻撃性を抑えきれない可能性があることが示された。

**中学生における反応的攻撃性に関する要因Ⅲ—生活習慣・学校経験との関連—**杉浦 幸・山田泰行・菊地奈美・水野基樹・田中純夫, 日本教育心理学会第48回総会

発表論文集 2006 pp662

キレル行動を改善するためには生活習慣や学校経験の状況を見ていくことは有効であると考えられる。中学生の攻撃性は彼らの学校や家庭での生活スタイルや習慣と様々なかたちで相互に影響しあっている。また直面した状況に対して有効に対処できるよう、ストレスコーピングや衝動性のコントロールに焦点を当てた介入の必要も有効であると考えられる。

**競技に対する他者からの承認が自尊感情の形成に及ぼす影響—運動有能感の変容を介在要因に据えて—**山田泰行・中島宣行・田中純夫・真鍋清孝・広沢正孝, 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集 pp56-57

スポーツという社会的に承認された活動で親や周囲の賞賛を浴びることが、スポーツ領域における同一性の獲得を強めるという指摘に基づき、競技者の自尊感情の形成に影響力を持つとして考えられる要因として「他者からの承認」に着目し、そのプロセスを解明した。その結果、チームメイトや指導者といった競技場面に関連する対象からの承認が運動有能感の変容をもたらし、自尊感情に影響を与えるプロセスが検証された。

**中学生における孤独感の変動要因に関する一考察—部活動に着目して—**今野 亮・山田泰行・田中純夫・中島宣行, 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集 pp178-179

状況的孤独感が社会状況の変化により解消されることが報告されており、本研究では生徒自身の選択によって変容可能な生活環境として、部活動の所属状況が中学生における孤独感の変動要因になりうるかどうかを検討した。その結果、中学生における孤独感の変動要因として影響力を持つものの一つとして部活動があげられ、団体競技に所属する生徒の孤独感が最も低いという可能性が示唆された。

**中学生の身体認識と反応的攻撃性および逸脱行動との関連**, 田中純夫・杉浦 幸・山田泰行・今野 亮・川田裕次郎・中島宣行, 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集 pp190-191

“キレル”衝動的攻撃行動を捉えるために濱口らが作成した“反応的攻撃性尺度”を再構成し、中学生の運動部での活動や身体に対する自己の認知の如何が、衝動的攻撃行動の抑制要因になりうるかどうかを検討した。そ

の結果, 身体の良い状態とその自覚が, 反応的攻撃性を低減させることが示された。

女子大学生アスリートの摂食問題に関する要因—ストレッサーと気分に着目して—, 杉浦 幸・広沢正孝・田中純夫・中島宣行, 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集 pp268-269

競技種目別に, 女子アスリートの摂食異常と競技ストレッサー, 気分の関連を明らかにすることを目的とした。その結果, 個人競技では, 成績停滞状況が直接的に摂食異常を導き, 抑うつについては摂食異常の結果によって生じることが示された。団体競技では「不承認」ストレッサーと「摂食異常」・「怒り」との間に関連性が認められた。

## 佐久間和彦

学会発表

1. 『身体重心速度変化からみたハードル走技術の分析』共同研究: 柳谷登志雄, 八幡賢司, 高田佑輔, 秋山佑介, 磯繁雄, 佐久間和彦, 土江寛裕 第19回日本トレーニング科学会 (立命館びわこ大学: 滋賀県)

2. 『短距離疾走動作に関する検討—MTC 長に着目して—』共同研究: 松本哲也, 高田佑輔, 北村和也, 佐久間和彦, 柳谷登志雄 第19回日本トレーニング科学会 (立命館びわこ大学: 滋賀県)

3. 『競技レベル別の110 m ハードル走における最大速度出現区間について』共同研究: 松本哲也, 秋山佑介, 北村和也, 佐久間和彦, 柳谷登志雄 第19回日本バイオメカニクス学会 (早稲田大学: 所沢)

4. 『牽引走による短距離走者のハムストリングスの肉離れとその予防』共同研究: 杉浦雄策, 佐久間和彦, 齋藤知行, 渋谷尚弘, 桜庭景植 第17回日本臨床スポーツ医学会 (新潟市朱鷺メッセ)

## 内藤 久士

原著論文

Sprint-interval training-induced alterations of myosin heavy chain isoforms and enzyme activities in rat di-

aphragm: Effect of normobaric hypoxia. Ogura Y, Naito H, Aoki J, Uchimar J, Sugiura T, Katamoto S. Jpn. J. Physiol. 55: 309-316, 2005.

Sprint-interval training induces heat shock protein 72 in rat skeletal muscles. Ogura Y, Naito H, Kurosaka M, Sugiura T, Aoki J, Katamoto S. J. Sports Sci. Med. 5: 194-201, 2006.

14日間の常圧低酸素室を利用した live High, train low が血液性状および平地での持久的運動能に及ぼす影響. 内丸仁, 内藤久士, 形本静夫, 青木純一郎. 生理人類学雑誌 11: 97-103, 2006.

Effects of low and high levels of moderate hypoxia on anaerobic energy release during supramaximal cycle exercise. Ogura Y, Katamoto S, Uchimar J, Takahashi K, Naito H. Eur. J. Appl. Physiol. 98: 41-47, 2006.

専門誌・報告書等

スポーツタレント発掘の現状と将来への展望. 内藤久士. トレーニングジャーナル 319: 32-33および 320: 30-31, 2006.

低酸素環境を利用したトレーニングが運動効率およびヘモグロビン酸素親和性に及ぼす影響. 内丸 仁, 田畑昭秀, 内藤久士, 形本静夫. デサントスポーツ科学 27: 154-163, 2006.

クレアチン摂取が暑熱環境下における長時間間欠的運動のパフォーマンスに及ぼす影響. 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 青木純一郎, 安松幹展. デサントスポーツ科学 27: 183-192, 2006.

筋損傷からの回復を促す温熱刺激. 杉浦崇夫, 後藤勝正, 内藤久士. 体育の科学 56: 714-719, 2006.

スポーツとストレス蛋白質. 内藤久士, 小倉裕司. 臨床病理 レビュー特集 137: 117-123, 2006.

平成十七年度体力・運動能力調査報告書. 青木純一郎, 内藤久士, その他体育局担当官 4名: 文部科学省 2006.



子どもの体力向上に向けて. 内藤久士. 文部科学時報 1569: 32-35, 2006.

招待・シンポジウム講演等

**ACTN3 gene and muscle function. IX th International Sports Science Congress** (Mugla, Turkey) 平成18年11月3日.

国際(海外)学会発表

**Intermittent normobaric hypoxia induces transient neutrophilia in sedentary subjects but not in trained.** Uchimaru J, Matsuo K, Naito H, Katamoto S, Nagatomi R. 53rd ACSM Annual Meeting (Denver). 平成18年6月1日. Med. Sci. Sports Exerc. 38: S77, 2006.

**Effect of heat preconditioning on the repeated bout effect.** Saga N, Katamoto S, Naito H. 53rd ACSM Annual Meeting (Denver). 平成18年6月1日. Med. Sci. Sports Exerc. 38: S385, 2006.

**Microwave treatment induces heat shock protein 72 in human skeletal muscle.** Ogura Y, Naito H, Saga N, Katamoto S, Tsurukawa T, Sugiura T. 53rd ACSM Annual Meeting (Denver). 平成18年6月3日. Med. Sci. Sports Exerc. 38: S548, 2006.

**Validity and reliability of the simple assessment of the time spent in moderate to vigorous intensity physical activity under the controlled conditions.** Ayabe M, Katamoto S, Kumahara H, Naito H, Shindo M, Tanaka H. 53rd ACSM Annual Meeting (Denver). 平成18年6月3日. Med. Sci. Sports Exerc. 38: S555, 2006.

**Effects of creatine supplementation on prolonged intermittent exercise in the heat.** Ishizaki S, Naito H, Katamoto S, Yasumatsu M, Inagaki M, Yoshimura M, Aoki J. 11th ECSS Annual Congress (Lausanne). 平成18年7月6日. Book of abstracts 70.

**Effects of spontaneous running on satellite cells in rat skeletal muscle.** Kurosaka M, Naito H, Ogura Y, Kojima A, Goto K, Katamoto S. 11th ECSS Annual Congress (Lausanne). 平成18年7月6日. Book of abstracts 143.

順天堂大学スポーツ健康科学研究 第11号 (2007)

**Relationship between ACTN3 genotype and myosin heavy chain composition in human.** Ogura Y, Naito H, Sekine-I N, Sugiura T, Aoki J, Katamoto S. 13th International conference: Biochemistry of exercise. 平成18年10月21日. Book of abstracts 153.

**Hormetic effects of regular exercise in aging: correlation with oxidative stress.** Goto S, Naito H, Kaneko T, Chung H. Y. and Radak Z. 13th International conference: Biochemistry of exercise. 平成18年10月23日. Book of abstracts 24.

国内学会発表

**萎縮骨格筋の回復家庭における細胞内シグナル伝達系への加齢差.** 杉浦崇夫, 後藤勝正, 内藤久士, 吉岡利忠. 第57回日本体力医学会中国・四国地方会(山口) 平成18年6月10日. 体力科学55(5): 538, 2006.

**吸気酸素濃度が超最大運動中の無酸素性エネルギー供給量に及ぼす影響.** 小倉裕司, 形本静夫, 内藤久士. 第14回日本運動生理学会大会(広島) 平成18年7月29日. Adv. Exerc. Sports Physiol. 12(3): 94, 2006.

**マイクロ波温熱負荷が血中CK活性に及ぼす影響.** 賀典生, 遠藤隆志, 関根紀子, 白石稔, 内藤久士, 形本静夫. 第14回日本運動生理学会大会(広島) 平成18年7月30日. Adv. Exerc. Sports Physiol. 12(3): 106, 2006.

**ALBAハイパーサーミア・システムを用いたマイクロ波温熱負荷における筋温の変化.** 関根紀子, 佐賀典生, 遠藤隆志, 白石稔, 内藤久士, 形本静夫. 第14回日本運動生理学会大会(広島) 平成18年7月30日. Adv. Exerc. Sports Physiol. 12(3): 106, 2006.

**発育期におけるラット骨格筋肥大に関わるシグナル伝達系の変化.** 杉浦崇夫, 後藤勝正, 内藤久士, 吉岡利忠. 第14回日本運動生理学会大会(広島) 平成18年7月30日. Adv. Exerc. Sports Physiol. 12(3): 107, 2006.

**ウォームアップが伸張性運動後のスパイクジャンプ高に及ぼす影響.** 柿木亮, 内藤久士, 佐賀典生, 綾部誠也, 形本静夫. 第57回日本体育学会(弘前) 平成18年8月18日.

ダウンヒルスプリントランニング後に生じる遅発性筋痛の繰り返し効果の性差. 長田朋樹, 佐賀典生, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. (弘前) 平成18年8月18日.

バリスティックストレッチが最大随意収縮力に及ぼす影響. 宮原祐徹, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. (弘前) 平成18年8月18日.

歩数計による中強度身体活動時間の評価. 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士, 熊原秀晃, 進藤宗洋, 田中宏暁. (弘前) 平成18年8月18日.

常圧低酸素室を用いた, Living high, Train Low (LHTL) が持久的競技選手の血中白血球動態に及ぼす影響. 内丸仁, 松生香里, 内藤久士, 形本静夫, 永富良一. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 760, 2006.

血圧上昇期の自発運動が自然発症高血圧ラットの心筋一酸化窒素合成酵素に及ぼす影響. 神野宏司, 古川覚, 池田啓一, 内藤久士, 山倉文幸. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 652, 2006.

加齢による萎縮筋の回復過程における細胞内シグナル伝達系の差異. 杉浦崇夫, 後藤勝正, 内藤久士, 吉岡利忠. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 466, 2006.

伸張性運動前の温熱処置のタイミングの違いが遅発性筋痛に及ぼす影響. 佐賀典生, 遠藤隆志, 小倉裕司, 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 626, 2006.

ACTN 遺伝子型と筋線維組成との関連性. 小倉裕司, 内藤久士, 形本静夫, 小林裕幸. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 628, 2006.

自発走トレーニングがラット骨格筋ストレスタンパク質発現に及ぼす影響. 黒坂光寿, 内藤久士, 小倉裕司, 形本静夫. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月26日. 体力科学55(6): 627, 2006.

静的ストレッチが等速性筋トルク発揮に及ぼす影響. 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 小倉裕司, 辻川比呂斗. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月25日. 体力科学55(6): 852, 2006.

中高強度身体活動計 NL-1000の有用性. 綾部誠也, 熊原秀晃, 森由香梨, 形本静夫, 内藤久士, 田中宏暁. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月25日. 体力科学55(6): 896, 2006.

クレアチン摂取が暑熱環境下における長時間間欠的運動のパフォーマンスに及ぼす影響. 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 安松幹展, 稲垣雅, 吉村雅文, 青木純一郎. 第61回日本体力医学会 (神戸) 平成18年9月24日. 体力科学55(6): 682, 2006.

Hyperthermia によるスポーツ傷害の治療経験. 白石稔, 牛島史雄, 関根紀子, 内藤久士, Arrigo Giombini. 第17回日本臨床スポーツ医学会学術集会 (新潟) 平成18年11月2日.

大学サッカー選手における等速性膝関節トルクと20 m 疾走能力との関係. 宮原祐徹, 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 鈴木茂雄, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 日本フットボール学会 4th congress (東京) 平成18年12月25日. 抄録集 P 46.

VMA の有酸素性作業能評価法としての有用性. 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 宮原祐徹, 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 日本フットボール学会 4th congress (東京) 平成18年12月25日. 抄録集 P 57.

## 飯嶋 正博

① 不器用な子どもへの運動指導47—リズム運動その6— 著者: 飯嶋正博 発達教育25(2) 14-15 2006. 1

リズム運動チェックリストを用いて言う動きの指導の留意点について解説し, 具体的に腹這い, 膝這い (四這い), 高這いの指導について紹介している.

② 不器用な子どもへの運動指導48—リズム運動その7— 著者: 飯嶋正博 発達教育25(3) 14-15 2006. 2

リズム運動チェックリストを用いて跳ぶ動きの指導の留意点について解説し、具体的にリープ、ホップ、ジャンプ、スキップの指導について紹介している。

③ 不器用な子どもへの運動指導49—誕生から生後6ヶ月まで— 著者：飯嶋正博 発達教育25(4) 14-15 2006. 3

連載5年目のテーマとして発達段階に沿って、必要な動きづくりについて解説し、具体的な指導法を紹介した。肩と腰の動きに焦点を当てている。

④ 動作発達の再考—子どもの動きづくり「腰」—(教育心理学講座第1回) 著者：飯嶋正博 いのちはぐくむ支援教育の展望141 52-55 2006. 4

一般的な運動発達の観点からではなく、障害児・者の教育相談から見出した発達課題から運動発達の盲点を解説し、その対処を紹介している。特に、腰の動きの観点が欠如している点と腰を上げる動きの重要性を指摘している。

⑤ 不器用な子どもへの運動指導50—バランスをとる腰(生後6ヶ月から1歳半まで)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(6) 14-15 2006. 4

座る、膝立ち、片膝立ち、蹲踞、立位の姿勢の獲得・保持に必要な重力に対してバランスをとる腰の動かし方について解説し、具体的な指導の方法を紹介している。

⑥ 不器用な子どもへの運動指導51—重力から離れる動き(歩く)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(7) 14-15 2006. 5

重力から離れる動きとして歩く、手腕の挙上、重力の影響を受けている口の動きを改善するための体操(導入版)を紹介している。

⑦ 不器用な子どもへの運動指導52—身辺自立(着替える、はく)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(8) 14-15 2006. 6

幼児期に重要な課題である身辺自立の動きの中から着替える動きを取り上げ、解説し、具体的にパンツやズボンをはく動きを、座ってはく場合と立ってはく場合を紹介している。

⑧ 動作発達の再考2—子どもの動きづくり「肩」と

「口」—(教育心理学講座第2回) 著者：飯嶋正博 いのちはぐくむ支援教育の展望142 46-49 2006. 7

一般的な運動発達の観点からではなく、障害児・者の教育相談から見出した発達課題から運動発達の盲点を解説し、その対処を紹介している。特に、重力に対応して腰を動かし直立姿勢を獲得する際に重要な中間姿勢(膝立ちと蹲踞)と腰が使えないと影響をうける肩と口の動きについて指摘している。

⑨ 不器用な子どもへの運動指導53—身辺自立その2(着る)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(9) 14-15 2006. 7

幼児期に重要な課題である身辺自立の動きの中から着替える動きを取り上げ、解説し、具体的にTシャツなどを着る動きと脱ぐ動きを紹介している。

⑩ 子どもの運動発達と動きづくり(講座：発達障害を学ぶ—基礎の知識と理解—) 共著：飯嶋正博、原仁、熊谷高幸ら計6名 発達協会テキスト 1A17-21 2006. 7

子どもの発達とその障害に関して、運動面に絞って、不器用さの原因とその対処法に関して具体的な実践例を解説、紹介している。

⑪ 不器用な子の指導 著者：飯嶋正博 第29回重複障害児教育講座要項(日本重複障害教育研究会) 32-34 2006. 8

不器用な子どもたちへの動きづくりに関して解説し、具体的に実技を交えて学ぶ研修会のテキストである。不器用さの原因、指導上の留意点、教材、指導法を紹介している。

⑫ 不器用な子どもへの運動指導54—自己接触・補助・抑制動作— 著者：飯嶋正博 発達教育25(10) 14-15 2006. 8

児童期に入り、自己中心性の行動から脱却するために必要な動きとして、自分の身体に触れる自己接触、自分の動きを助ける自己補助、自分の動きを自分自身で抑える自己抑制のための動きを解説し、具体的な指導の方法を紹介している。

⑬ 不器用な子への運動指導—動作の伝え方・教え方— 著者：飯嶋正博 発達協会実践講座テキスト 1-14

2006. 9

不器用な子どもたちへの動きづくりに関して解説し、具体的に実技を交えて学ぶ研修会のテキストである。不器用さの原因、指導上の留意点、教材、指導法を紹介している。

⑭ 不器用な子どもへの運動指導55—対人関係動作—  
著者：飯嶋正博 発達教育25(11) 14-15 2006. 9

児童期に重要な社会性を向上させるために必要な動きとして、対人関係動作を解説し、具体的に模倣、対応、競走、協同の動きについて指導法を紹介している。

⑮ 教育現場で使う動作法—指導実践を通して最近考えていること— 著者：飯嶋正博 ふえにつくす66 4-7 2006. 10

教育場面で著者が行ってきた動作法を紹介し、実践する際の留意点や指導する上で重要な動作課題の構造化について解説した。

⑯ 動作発達の再考3—子どもの動きづくり「呼吸」と「手・腕」—(教育心理学講座第3回) 著者：飯嶋正博  
いのちはぐくむ支援教育の展望143 51-54 2006. 10

一般的な運動発達の観点からではなく、障害児・者の教育相談から見出した発達課題から運動発達の盲点を解説し、その対処を紹介している。特に、口の動きにおけるあくびと吹く動きについて、さらに手・腕の動きにおける弾く、摘む、振る動きについて指摘している。

⑰ 不器用な子どもへの運動指導56—思春期において(下半身の動きの問題)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(12) 14-15 2006. 10

思春期において必要とされる動きの中から、問題行動にもつながり易い下半身の動きとして、男子の立っての排尿、女子のお尻の拭き方を取り上げて解説し、具体的な指導について紹介している。

⑱ 不器用な子どもへの運動指導57—思春期の動きづくり2(人とのかかわり方)— 著者：飯嶋正博 発達教育25(13) 14-15 2006. 11

思春期において必要とされる動きの中から、人とのかかわり方として、握手などの挨拶の仕方、スキンシップとしての触れ方、ダンスの効用を解説し、具体的な指導を紹介している。

⑲ スポーツ選手の三角形イメージ体験に関する検討①—気分状態・自己効力感・運動有能感の観点から— 共著：木下玲子、杉浦幸、飯嶋正博、中島宣行 日本スポーツ心理学会第33回大会 研究発表抄録集 170-171 2006. 12

三角イメージ体験のメンタルトレーニングとしての有効性を検討する一連の研究として、気分状態や自己・運動効力感とどのような関連があるか検討した。不安や抑うつ気分との関連、効力感の高さが影響することが示唆された。

⑳ スポーツ選手の三角形イメージ体験に関する検討②—形態・色彩心理学の観点から— 共著：飯嶋正博、杉浦幸、木下玲子、中島宣行 日本スポーツ心理学会第33回大会 研究発表抄録集 172-173 2006. 12

三角イメージ体験のメンタルトレーニングとしての有効性を検討する一連の研究として、大きさや角の鋭敏化などの形態の変化以外に、さらに輪郭や面の黒色の強調といった色彩が気分状態とのかかわりが強いことが示唆された。

㉑ 不器用な子どもへの運動指導58—棒を扱う動き—  
著者：飯嶋正博 発達教育26(1) 14-15 2006. 12

社会人として自立する際に、社会生活に不可欠な棒を扱う動きとして箒ではなく、ブラシでこする、スコップですくう動きを取り上げ、具体的な指導の方法について解説し、紹介している。

## 柳谷登志雄

[原著論文]

Yanagiya T, Kanehisa H, Tachi M, Takeshita K, Sugisaki N, Wakahara T, Murata K, Takata Y, Kawakami Y, Fukunaga T and Kuno S Effects of age and gender on the power generation capabilities of lower limb muscles in the elderly International Journal of Sport and Health Science. (in press)

[学会発表]

1) 柳谷登志雄, 松本哲也, 山田泰行, 杉浦 幸, 菊地奈美, 水野有希, 水野基樹. 「バス運行時における立位乗車の動作解析に関する研究」第41回人類働態学会(小淵沢).

- 2) 杉浦 幸, 菊地奈美, 山田泰行, 柳谷登志雄, 田中純夫, 水野有希, 水野基樹. 「バス車内事故への意識と統制の所在に関する研究」第41回人類動態学会(小淵沢).
- 3) 山田泰行, 菊地奈美, 杉浦 幸, 柳谷登志雄, 田中純夫, 水野有希, 水野基樹. 「バス運転手の安全運転業務を妨げる心理的要因の検討」, (小淵沢).
- 4) 柳谷登志雄, 小山桂史, 松本哲也, 北村和也, 佐久間和彦, 福永哲夫. 「モーメントアーム長は走パフォーマンスの決定因子であるのか?」第19回日本バイオメカニクス学会 (所沢).
- 5) 小山桂史, 松本哲也, 柳谷登志雄. 「大腿直筋と中間広筋の筋厚比と長距離選手の走動作との関係」第19回日本バイオメカニクス学会 (所沢).
- 6) 松本哲也, 秋山祐介, 北村和也, 佐久間和彦, 柳谷登志雄. 「競技レベル別の110 m ハードル走における最大速度出現区間について」第19回日本バイオメカニクス学会 (所沢).
- 7) 柳谷登志雄, 八幡賢司, 高田佑輔, 秋山祐介, 磯繁雄, 佐久間和彦, 土江寛裕. 「身体重心速度変化からみたハードル走技術の分析」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 8) 松尾彰文, 広川龍太郎, 柳谷登志雄, 杉田正明, 阿江通良. 「レーザー方式スピード測定装置による100 m のラップタイム分析」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 9) 大野史織, 松本哲也, 高田佑輔, 佐久間和彦, 柳谷登志雄. 「外側広筋の筋束長と疾走能力の関係」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 10) 松本哲也, 高田佑輔, 北村和也, 佐久間和彦, 柳谷登志雄. 「短距離疾走動作に関する検討—MTC 長に着目して—」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 11) 小山桂史, 高田佑輔, 松本哲也, 北村和也, 柳谷登志雄. 「陸上長距離走競技者の走動作と下肢筋厚, 筋厚比の関係」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 12) 鈴木晋平, 松本哲也, 高田佑輔, 柳谷登志雄. 「野球のスイング動作のバイオメカニクス的研究—異なる重量のバットを用いたスイング練習の有効性について—」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).
- 13) 橋 亮造, 松本哲也, 高田佑輔, 金子今朝秋, 柳谷登志雄. 「三次元 DLT 法を用いた円盤投げ動作の評価ポイント作成の試み」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

## [雑誌記事]

- 1) ベストパフォーマンス分析@大阪インターハイ 2006 バイオメカニクスレポート. 男子100 m. 杉田正明, 柳谷登志雄, 鈴木雄太, 榎本靖士. P. 142, 陸上競技マガジン, 11月号, 2006.
- 2) ベストパフォーマンス分析@大阪インターハイ 2006 バイオメカニクスレポート. 女子100 m. 杉田正明, 柳谷登志雄, 鈴木雄太, 榎本靖士. P. 142, 陸上競技マガジン, 11月号, 2006.
- 3) ベストパフォーマンス分析@大阪インターハイ 2006 バイオメカニクスレポート. 男子200 m. 柳谷登志雄, 杉田正明, 松本哲也, 鈴木雄太, 榎本靖士. 142, 陸上競技マガジン, 11月号, 2006.
- 4) ベストパフォーマンス分析@大阪インターハイ 2006 バイオメカニクスレポート. 女子400 m. 柳谷登志雄, 杉田正明, 鈴木雄太, 榎本靖士. 142, 陸上競技マガジン, 11月号, 2006.
- 5) 陸上競技のサイエンス タイム分析のためのテクニック. 柳谷登志雄, 月刊陸上競技10月号, 2006.

## 水野 基樹

## 【著書】

小林末男監修『現在経営組織学辞典』創成社, 2006年2月

経営組織学における主要語句の解説を行った. 具体的には, 「ステークホルダー」, 「スタッフ部門」, 「スタッフとライン」, 「スタッフ機能」, 「水質環境基準」, 「IC」, 「コーチング」, 「360度評価」, 「組織コミットメント」, 「バランスト・スコアカード」, 「コンピテンシー」などの解説を行った.

日本経営教育学会編『経営教育事典』学文社, 2006年6月

経営教育学における主要な人名および専門用語である「E. H. Schein」と「複雑人モデル」についての解説を行った.

『Evidence-based Occupational Health』Elsevier, 2006. Editors: Takashi MUTO, Toshiaki HIGASHI, Jos VERBEEK 「A Human Resource Management Approach to Motivation and Job Stress in Paramedics」 Authors: Motoki MIZUNO, Yasuyuki YAMADA, Anna ISHII, Su-

mio TANAKA

The questionnaire investigation related to the motivation and job stress targeting paramedics in Japan was carried out in 2003. Valid respondents were 115 paramedics out of several areas of Chiba prefecture in Japan. For the analysis, the covariance structural modeling method was chosen because of examining the cause and effect relationships of several complex constructs at the same time. The first model investigated the job satisfaction variables leading to stress. The fit indices did not reveal an excellent fit of the model to the data. So, there is much room to improve the model, after increasing the subject from now on. The second model investigated the confidant variables leading to stress. The fit indices also reveal an excellent fit of the model to the data. (pp. 167-170)

【論文・学会発表・Proceedings】

「救急救命士の職務ストレスと健康状態に関する研究」研究者：水野基樹，山田泰行，石井杏奈，田中純夫 順天堂大学スポーツ健康科学研究，第10号，2007年3月，1-8頁。

救急救命士のモチベーション発生要因としての職務ストレスと健康状態に焦点を当て，両者に影響を与える要因を共分散構造分析の結果に基づいて考察を行った。結論として，救急救命士のストレス軽減には，「時間・ゆとり」という因子が，そして健康状態については，「職場の良好な人間関係」がストレス抑制要因として機能するということが明らかになった。

「運動選手の用いるストレスコーピングの共通性に関する研究—性差と競技特性に着目して—」研究者：山田泰行，中島宣行，広沢正孝，田中純夫，水野基樹，杉浦幸 順天堂大学スポーツ健康科学研究，第10号，2007年3月，21-28頁。

競技特性と性差という選手の属性に着目し，群分けをした選手のコーピングの傾向を把握しようと試みた。結果としては，選手の用いるコーピングの中には，性差と競技特性によって決定されているものが存在することが実証された。さらに，各群によって，抑うつに関連性のあるコーピングが異なることも確認された。よって，性差間と競技間において採用されるコーピングの共通性が認められた。

「中学生の攻撃性と学校適応との関連—中学生用機能的攻撃性尺度（FAS）の作成を通して—」研究者：田中純夫，山田泰行，杉浦幸，菊地奈美，今野亮，水野基樹 順天堂大学スポーツ健康科学研究，第10号，2007年3月，50-58頁。

中学生における攻撃性は，攻撃行動の認知的決定要因から捉えようとする機能的攻撃性尺度によって，ある程度の確に捉えることが可能であることが明らかになった。また，攻撃行動の抑制要因としてのコーピングスタイルを考えると，感情表出や回避のような多義的な機能を含むものはできるだけ排除して構成する必要があると考えられる。

「医療保健と学校教育の協働による地域保健システム構築への組織論的研究—思春期教育に対するピアエデュケーター養成セミナーの実践事例を中心に—」研究者：水野基樹，田中純夫，臺有桂，北村薫 順天堂大学医療看護研究，第2巻1号，2007年3月，29-37頁。

思春期教育に対する取り組みが，学校での自己完結的な活動から保健所との協働による有機的な連携へとシフトしてきている。そこで，地域社会における関係機関が連携を図り，各々の役割や機能を明確化することで，家庭教育の支援や思春期に噴出する性の問題等への健全育成活動に資するシステムの構築に関して論及した。とりわけ，ピアエデュケーター養成セミナーを事例として取り上げ，セミナー運営の仕組みを境界ではなく，システムとして組織を把握するという観点から論じた。

「バス運行時における立位乗車の動作解析に関する研究」研究者：柳谷登志雄，松本哲也，山田泰行，杉浦幸，菊地奈美，水野有希，水野基樹 人類動態学会第41回全国大会予稿集，2007年6月，30-31頁。

本研究の結果より，立位バス乗車中における乗客の身体動作および身体に作用する力が明らかにされた。腰部を軸として身体外力を緩衝しようとする際には，腰部のみならず，つり革を握る手や腕周りの筋にまで負担がかかることが推察される。急発進や急停車といった危険運転時には，さらに大きな力がかかることが予想された。

「バス乗客の転倒注意と Locus of Control に関する研究」研究者：杉浦幸，菊地奈美，山田泰行，柳谷登志雄，田中純夫，水野有希，水野基樹 人類動態学会第41回全国大会予稿集，2007年6月，42-43頁。

バス乗客の転倒注意を高めるためには、転倒防止の具体的方法を提示するなど、乗客が転倒に対して対処可能であることを認識してもらうといった内的統制感へのアプローチが必要であると考えられた。また、高齢者では、安全装置の使用などと併せて行う必要性が明らかとなった。

「バス運転手の安全運転業務を妨げる心理的要因」研究者：山田泰行，菊地奈美，杉浦幸，柳谷登志雄，田中純夫，水野有希，水野基樹 人類労働学会第41回全国大会予稿集，2007年6月，44-45頁。

バス運転手の安全運転業務を妨げるストレス反応を明確化し，それらのストレス反応との関連が予想される要因として職務ストレスと他者からの承認に着目して検証を行った。結果として，運転手に対して，精神的に健康な状態で業務に臨むことのできる環境を提供することは，心理的側面における車内事故防止対策として有効であることが明らかとなった。

「女性の働きやすさと職場の支援体制に関する研究」研究者：松田文子，水野有希，水野基樹，酒井一博 日本人間工学会誌，第42巻特別号，2007年6月，298-299頁。

上司の考え方が女性の就労に対する職場の雰囲気にも，大いに影響することが明らかになった。働きやすさの要素はそれぞれであろうが，育児支援は多くの女性にとって関心の高い要素である。小規模な医療機関では，院内保育の充実などは望みにくいが，近隣の保育所やサポートファミリーなどの活用を職場ぐるみで進め，両立したいという意欲を維持できるように努力することが必要とされる。今後の課題として，職場の環境のみならず，家庭環境や夫の協力の程度，家事分担，育児分担などの点についても検討し，具体的な両立支援策について検討する必要性が明らかになった。

「女性労働者における仕事と育児の両立に関する研究」研究者：水野有希，水野基樹，松田文子，酒井一博 日本人間工学会誌，第42巻特別号，2007年6月，300-301頁。

子育てをしながら仕事することに充実感をもっている者が多く，仕事と両立することに対して夫が肯定的に感じていると回答する者が多かった。しかし，子供の年齢が小さいほど時間に追われていると感じており，自分の休息時間を削って生活しているため，睡眠不足や疲労な

どの訴えが高く，仕事と家事の両立に対する満足度は低い傾向にあった。また，同時期に夫の家事援助の割合が高くなるものの，男性の就業時間が長いこと，時間的に育児参加が十分にできていないようであった。以上のことから，子育て中の男女労働者に対しては家庭の状況（子供の年齢，人数）を配慮した就業時間の管理をし，さらに，男性の育児意識を高め，男性が育児に参加しやすい環境の整備を積極的に行うことが必要である。

「高齢者乗客の動作解析とバス運転手の意識調査との関連性」研究者：水野基樹（代表） 人類労働学会平成18年度夏季研究会（於：千葉工業大学）

人類労働学会における「バス車内事故防止のためのワークショップ」にて，研究代表者として研究成果を発表した。バス利用者アンケート調査とバス乗車時における高齢者の動作解析の成果を中心に，乗客の転倒意識とバス運転手の疲労やストレスを評価し，転倒防止装置の有効性を確認した。

「A Study on Work Stress and Work-Family Balance of Nurses in Japan」Authors: Motoki MIZUNO, Yasuyuki YAMADA, Yuki MIZUNO, Fumiko MATSUDA, Tomoe KOIZUMI, Kazuhiro SAKAI Proceedings IEA2006 Congress, Maastricht, Netherlands, CD-ROM, Elsevier.

The findings suggest that nurses should be managed in consideration of the above adequately to decrease the work stress and boost health conditions. The implication of this study is that the intervention as one of the organizational designs to reduce the work stress and enhance the health conditions can improve the effects of the job satisfaction and work-family balance. Reduction of the work stress and enhancement of the health conditions also appeared to be helpful for work motivation of nurses in Japan.

「Effects of Interpersonal Traits of Japanese Nurses on Psychological Stress」Authors: Yasuyuki YAMADA, Masataka HIROSAWA, Motoki MIZUNO, Fumiko MATSUDA, Tomoe KOIZUMI, Kazuhiro SAKAI Proceedings IEA2006 Congress, Maastricht, Netherlands, CD-ROM, Elsevier.

The purpose of this study is to examine the negative effects of the "concern for others" of Japanese nurses on their psychological stress. The psychological stress was un-

derstood by the relation between stressor and stress response based on the stress model of Lazarus. We used the concept of the work-family spillover as the stressor. We adopted W-F-NSP and F-W-NSP as the negative stressor, W-F-PSP and F-W-PSP as the positive stressor, the melancholy as negative stress response, and the health condition as the positive stress response.

「スポーツフィットネスクラブ従業員の雇用形態とキャリア成熟に関する研究—Planned Happenstance Theoryからのアプローチ—」研究者：水野基樹，菊地奈美 日本体育学会第57回大会予稿集，2006年8月，119頁。

サービス産業における成長産業のひとつであるフィットネス業界を対象に，529名（男性223名，女性306名）の従業員のパーソナリティとキャリア成熟に関する質問紙調査を2005年に実施した。とりわけ，雇用形態によるキャリア成熟の相違というパースペクティブから検討を行った。分析の理論的枠組みは，キャリア意思決定における社会的学習を理論化した Krumboltz による Planned Happenstance Theory を用いた。結果として，あらゆる雇用形態でキャリアに関する「計画性」の程度において，「関心性」や「自律性」と比較して興味深い有意差が確認された。また，正規従業員は非正規従業員よりもキャリア成熟度が高いことも明らかになった。

「中学生における攻撃性の変動要因と学校適応Ⅰ—機能的攻撃性尺度（FAS）の中学生への適用と学校適応からの検討—」研究者：田中純夫，山田泰行，杉浦 幸，菊地奈美，水野基樹 日本犯罪心理学会第44回大会研究発表論文集（印刷中），2007年9月。

本研究では，「学校適応」「対人不和」を被説明変数として，攻撃性とストレスコーピングを説明変数として，共分散構造分析を行なった。攻撃性の下位尺度「支配・自己本位」，「猜疑心」「報復心」からは潜在変数として，対人関係から誘発される「対人反動的攻撃性」を抽出し，「競争心」，「自己顕示性」，「執着心」からは自己に拘って目的を逃げようとする「自己充足的攻撃性」が導き出された。「対人反動的攻撃性」は，「対人不和」を助長し，「学校適応」を阻害しており，コーピングの「サポート希求」と「問題解決」がこの攻撃性を抑制する要因になっていることが示唆される。「自己充足的攻撃性」は，むしろ「学校適応」にプラスに作用する側面もあり，コーピングの「感情表出」との関連が示された。

「中学生における攻撃性の変動要因と学校適応Ⅱ—攻撃性の持つ2つの機能の明確化—」研究者：杉浦 幸，山田泰行，田中純夫，菊地奈美，水野基樹 日本犯罪心理学会第44回大会研究発表論文集（印刷中），2007年9月。

本研究においては，対人トラブルと自尊感情との関連モデルを作成し共分散構造分析によって検証した。その結果，「対人反動的攻撃性」は自尊感情に負の影響を，「自己充足的攻撃性」は正の影響を示した。従って，攻撃性の機能や表出方略の違いは，自己評価の側面にも影響することが示唆されたと考えられる。

「中学生における攻撃性の変動要因と学校適応Ⅲ—認知・感情・経験的側面から見た変動要因の検討—」研究者：山田泰行，杉浦 幸，田中純夫，水野基樹 日本犯罪心理学会第44回大会研究発表論文集（印刷中），2007年9月。

本研究において，認知的側面との関連では，男子で対話重視が猜疑心と自己充足的攻撃の促進に，女子では衝動的攻撃動機と関係性攻撃の抑制に関連する傾向がみられた。感情的側面との関連では，男女共に自尊感情が衝動的攻撃動機の抑制に関連し，とりわけ女子では自己顕示性の促進に関連していた。経験的側面との関連では，男子で学校生活での肯定的経験が自己充足的攻撃の促進に関連していた。とからも窺えるが，中学生の女子は仲間集団にうまく身を置くことで精神的安定が保たれるものと考えられる。

「中学生における反動的攻撃性に関連する要因Ⅰ—認知的側面との関連—」研究者：田中純夫，山田泰行，杉浦幸，菊地奈美，水野基樹 日本教育心理学会第48回総会研究発表論文集，2007年9月，660頁。

本研究においては，男子で，「他者の視点取得」が高いほど，「怒り」「報復意図」は低くなっている。女子では，「対話重視」も攻撃性とわずかながら関係していることと，身体的に快適な状況である「身体認識」も反動的攻撃性を低減する可能性を示唆する結果となった。根源的な事象について，多面的に関心を向けることが，他者からの行為に対する報復行動の発現には抑制的な影響をもつ可能性が示唆される結果である。

「中学生における反動的攻撃性に関連する要因Ⅱ—感情的側面との関連—」研究者：山田泰行，杉浦 幸，菊地奈美，水野基樹，田中純夫 日本教育心理学会第48回総



会研究発表論文集, 2007年9月, 661頁.

本研究では, 反応的攻撃性と孤独感との相関において男子では孤独感が「怒り」と関連する要因として認められたものの, 「報復意図」との関連は認められなかった. その一方で, 女子では「孤独感」は「報復意図」及び「怒り」双方との間に関連が認められた. それに対して女子の反応的攻撃性は対象に向けられやすいと考えられる. 自尊感情は男女共に「怒り」にある程度関連する要因として認められたが, 「報復意図」との関連性は認められなかった.

「中学生における反応的攻撃性に関連する要因Ⅲ—生活習慣・学校経験との関連—」研究者: 杉浦 幸, 山田泰行, 菊地奈美, 水野基樹, 田中純夫 日本教育心理学会第48回総会研究発表論文集, 2007年9月, 662頁.

本研究では, 男子においては, ネガティブな学校経験が「怒り」と関連していたものの, 多くの項目では反応的攻撃性と目立った関連が見られなかった. そのため, 性格特性や認知的側面から反応的攻撃性と関連する要因をさらに検討する必要があると考えられる. 一方, 女子では, 生活習慣や学校経験と反応的攻撃性との間で多くの関連性が認められていたため, 攻撃行動が状況により変動しやすいと考えられた.

「Family to Work Negative Spillover 尺度は看護師の健康状態まで正しく評価するか?」研究者: 山田泰行, 水野基樹, 広沢正孝, 酒井一博 産業保健人間工学会誌特別号, 2007年11月, 93-96頁.

本研究では, F-W-NSP 尺度は良好な健康状態と正の相関を示し, 欠乏仮説を反映しなかった. その原因として, F-W-NSP 尺度の高得点者は非他者配慮性格, 休暇の主張・消化, 良好な職場環境, 高い世帯年収といった要因を満たすことが明らかとなった. 従って, F-W-NSP を高めることによって良好な健康状態がもたらされるわけではなく, 健康状態を促すと考えられる前述の要因を満たす者が F-W-NSP 尺度の高得点群に多く含まれているという結果が得られた.

「相談業務従事者の労働環境と職務ストレス」研究者: 川田裕次郎, 田中純夫, 菊地未起子, 水野基樹 産業保健人間工学会誌特別号, 2007年11月, 105-108頁.

本研究では, ストレスを低減させる要因として, 職務満足感では仕事そのものの「働きがい」が最も重要であ

ることが示され, 次いで, 職場の上司のサポートがきわめて重要であった. また, ストレスコーピングにおいては, 現状を冷静に受け止め, 具体的な解決方法を模索する態度を身につけることが, ストレスに立ち向かうために必要であるという当然の結果が導かれた. また, 労働条件の違いでは, 非常勤の相談員は, 休暇などの条件の影響を大きく受けるが, 常勤では業務の内容そのものの影響が大きい. 臨床経験の利害から見ると, 熟練した相談員ほど, 上司や同僚などから上手にサポートを引き出していることが伺われた. 他者との協働のセンスが臨床の基盤であることから重要な着眼点となろう.

「体育系大学の女子新入生における摂食問題—月経・性格傾向との関連—」研究者: 杉浦幸, 広沢正孝, 田中純夫, 中島宣行, 水野基樹 産業保健人間工学会誌特別号, 2007年11月, 113-116頁.

体育系大学の女子新入生の DE (Disordered Eating) 発現率は, 一般人と同程度であり, 大学入学後に上昇する可能性があると考えられた. DE 傾向の競技者では, 同時に月経についても注意する必要があると考えられる. また, 競技者の DE への対応を行なう場合には, 個人の持つ性格特性と所属する団体に特有の特性や風土の双方を考慮し対応する必要があると考えられる.

「スポーツ選手のキャリアに関する理論的視座」研究者: 水野基樹 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集, 2007年12月, 188-189頁.

スポーツ選手のキャリアに関する研究は, 選手の自己認識トレーニングに基軸を置いた成果も散見されるものの, その中心的なパースペクティブがアウトブレースメントの内容に終始してしまう傾向が多いことも否めない. よって本研究では, 多数あるキャリアに関する研究を整理して, とりわけ経営学的なパースペクティブから, スポーツ選手に対する理論的視座を提供することを目的とする. なかでも, 従来までのトランジション理論とは, 全く異なる立場を取る理論 (Planned Happenstance Theory) の枠組みからの提言を行った.

Krumboltz (1999) は, 積極的に日常から能動的な行動を起こしていくことで, 自己のキャリア発達を実現することが重要とする. つまり, ネガティブな特殊経験をベースとした自己変容ではなく, 変化が顕在化するよりも前から日常経験のなかで行動変容を図るという立場を重視する姿勢が肝心であると結論づけした.

## 【報告書】

「高齢者乗客の動作解析とバス運転手の意識調査との関連性」代表研究者：水野基樹 研究者：田中純夫，柳谷登志雄 協力研究者：山田泰行，杉浦 幸，菊地奈美 国土交通省自動車交通局平成17年度委託事業『高齢者のバス利用実態と車内働きの分析に係る調査』労働科学研究所編集

本報告書は，乗客アンケートと高齢者動作解析の結果に基づいて作成された。事故を未然に防ぐためには，乗客に対して転倒事故が運や偶然というよりも，むしろ自らの責任によって起こる可能性があること，注意や工夫によって可避的であることを認識してもらう必要があり，動作解析の結果を踏まえた転倒防止装置の導入・開発を進めるべきであることを提言した。

## 【その他】

「新しい働き方を探る(18)ーディセンタリングー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第2号，2006年2月，47頁。

「(書評) HRM マスターコース」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第3号，2006年2月，63頁。

「新しい働き方を探る(19)ーダイバーシティ・マネジメントー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第4号，2006年3月，54頁。

「新しい働き方を探る(20)ーエスカレーション現象ー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第6号，2006年5月，54頁。

「新しい働き方を探る(21)ーキャリア・プラトナーー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第8号，2006年7月，52頁。

「新しい働き方を探る(22)ースロー・キャリアーー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第10号，2007年9月，49頁。

「(書評) 熱狂する社員ー企業競争力を決定するモチベーションの3要素ー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第11号，2006年10月，63頁。

「新しい働き方を探る(23)ーリテンション・マネジメントー」『労働の科学』労働科学研究所，第61巻第12号，2006年11月，54頁。

## 形本 静夫

## 【原著論文】

① **Sprint-interval training induces heat shock protein 72 in rat skeletal muscles.** Ogura Y, Naito H, Kurosaka M, Sugiura T, Aoki J, Katamoto S. J. Sports Sci. Med. 5: 194-201, 2006.

高強度のインターバルトレーニングによって，ラット骨格筋のHSP72の誘導は増加するが，その増加は筋のタイプにより異なり，速筋タイプの筋でより大きいことを示唆した。

② **Effects of low and high levels of moderate hypoxia on anaerobic energy release during supramaximal cycle exercise.** Ogura Y, Katamoto S, Uchimarum J, Takahashi K, Naito H. Eur. J. Appl. Physiol. 98: 41-47, 2006

低酸素刺激によるヒトの無酸素的エネルギー遊離の有意な増大は，酸素濃度に依存することを明らかにした。

③ **14日間の常圧低酸素室を利用した Live high, train low が血液性状および平地での持久的運動能に及ぼす影響.** 内丸 仁，内藤久士，形本静夫，青木純一郎. 日本生理人類学雑誌 11(3): 5-12, 2006

14日間，2500 m 相当の常圧低酸素室に滞在することは赤血球生成を刺激するが，赤血球数の増加をもたらすまでには至らないことを明らかにした。

④ **Sensory processing during kinesthetic aftereffect following illusory hand movement elicited by tendon vibration.** Kito T, Hashimoto T, Yoneda T, Katamoto S, Naito E. Brain Res. 1114(1): 75-84, 2006

「米田継武」の項参照

## 【研究報告】

① **温熱環境での身体負荷.** 形本静夫，綾部誠也. 業務用電化厨房労働環境に関する文献調査報告書，32-41, 2006.

② **競技力向上のための高所および低酸素ルームの効果.** 澤木啓祐，鯉川なつえ，河合祥雄，形本静夫，鈴木いずみ，内丸 仁，仲村 明. 平成13年度 JISS スポーツ医・科学研究事業委託研究報告書，7-12, 2006

③ **競歩種目における高所および低酸素室利用の効果.**

澤木啓祐, 鯉川なつえ, 今村文男, 鈴木いずみ, 内丸仁, 仲村 明, 河合祥雄, 形本静夫. 平成15年度 JISS スポーツ医・科学研究事業委託研究報告書, 3-8, 2006

④ 自転車中・長距離種目競技力向上のための常圧低酸素室を利用した Living in Hypoxia, Training in Normoxia 法 (LHTN) および高地トレーニングの開発と実践. 形本静夫, 内丸 仁, 高橋松吉, 福田公夫, 高橋光平, 小林裕幸, 宮崎暁子. 平成15年度 JISS スポーツ医・科学研究事業委託研究報告書, 26-38, 2006

⑤ 常圧低酸素室を利用した Living in Hypoxia, Training in Normoxia 法 (LHTN) および高地トレーニングに関する研究. 形本静夫, 内丸 仁, 高橋松吉, 福田公夫, 小林裕幸, 宮崎暁子, 高橋光平, 小倉裕司. 平成16年度 JISS スポーツ医・科学研究事業委託研究報告書, 114-122, 2006

⑥ クレアチン摂取が暑熱環境下における長時間間欠的運動のパフォーマンスに及ぼす影響. 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 青木純一郎, 安松幹展. デサントスポーツ科学 27: 183-192, 2006

⑦ 低酸素環境を利用したトレーニングが運動効率およびヘモグロビン酸素親和性に及ぼす影響. 内丸 仁, 田畑昭秀, 内藤久士, 形本静夫. デサントスポーツ科学 27: 154-163, 2006

#### 【学会発表】

① Effect of heat preconditioning on the repeated bout effect. Saga N, Katamoto S, Naito H. The American College of Sports Medicine 53rd Annual Meeting, 2006. 6

② Microwave treatment induces heat shock protein 72 in human skeletal muscle. Ogura Y, Naito H, Saga N, Katamoto S, Tsurukawa T, Sugiura T. The American College of Sports Medicine 53rd Annual Meeting, 2006. 6

③ Validity and reliability of the simple assessment of the time spent in moderate to vigorous intensity physical activity under the controlled conditions. Ayabe M, Katamoto S, Kumahara H, Naito H, Shindo M and Tanaka H. The American College of Sports Medicine 53rd Annual Meeting, 2006. 6

④ Effects of spontaneous running on satellite cells in rat skeletal muscle. Kurosaka M, Naito H, Ogura Y, Kojima A, Goto K, Katamoto S. 11th annual Congress of the European College of Sport Science, 2006. 7

⑤ Effects of creatine supplementation on prolonged in-

termittent exercise in the heat. Ishizaki S, Naito H, Katamoto S, Yasumatsu M, Inagaki M, Yoshimura M and Aoki J. 11th annual Congress of the European College of Sport Science, 2006. 7

⑥ 運動前のマイクロ波温熱負荷が長時間運動後の筋機能に与える影響. 遠藤隆志, 佐賀典生, 関根紀子, 白石稔, 内藤久士, 形本静夫. 第14回日本運動生理学会, 2006. 7

⑦ マイクロ波温熱負荷が血中CK活性に及ぼす影響. 佐賀典生, 遠藤隆志, 関根紀子, 白石稔, 内藤久士, 形本静夫. 第14回日本運動生理学会, 2006. 7

⑧ ALBA ハイパーサーミア・システムを用いたマイクロ波温熱負荷における筋温の変化. 関根紀子, 佐賀典生, 遠藤隆志, 白石稔, 内藤久士, 形本静夫. 第14回日本運動生理学会, 2006. 7

⑨ ウォームアップが伸張性運動後のスパイクジャンプ高に及ぼす影響. 柿木亮, 内藤久士, 佐賀典生, 綾部誠也, 形本静夫. 第57回日本体育学会, 2006. 8

⑩ ダウンヒルスプリントランニング後に生じる遅発性筋痛の繰り返し効果の性差. 長田朋樹, 佐賀典生, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. 第57回日本体育学会, 2006. 8

⑪ パリスティックストレッチングが最大随意収縮力に及ぼす影響. 宮原祐徹, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. 第57回日本体育学会, 2006. 8

⑫ 歩数計による中強度身体活動時間の評価. 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士, 熊原秀晃, 進藤宗洋, 田中宏暁. 第57回日本体育学会, 2006. 8

⑬ 骨格筋及び肝臓における細胞内質の生理学的意義. 田村好史, 田中逸, 高橋光平, 土居進, 形本静夫, 河盛隆造. 第61回日本体力医学会, 2006. 9 (学会発表奨励賞受賞)

⑭ 常圧低酸素室を用いた, Living High, Train Low (LHTL) が持久的競技選手の血中白血球動態に及ぼす影響. 内丸仁, 松生香里, 内藤久士, 形本静夫, 永富良一. 第61回日本体力医学会, 2006. 9

⑮ 伸張性運動前の温熱処置のタイミングの違いが遅発性筋痛に及ぼす影響. 佐賀典生, 遠藤隆志, 小倉裕司, 綾部誠也, 形本静夫, 内藤久士. 第61回日本体力医学会, 2006. 9

⑯ ACTN 遺伝子型と筋線維組成との関連性. 小倉裕司, 内藤久士, 形本静夫, 小林裕幸. 第61回日本体力医学会, 2006. 9

- ⑰ 自発走トレーニングがラット骨格筋ストレスタンパク質発現に及ぼす影響. 黒坂光寿, 内藤久士, 小倉裕司, 形本静夫. 第61回日本体力医学会, 2006. 9
- ⑱ 静的ストレッチングが等速性筋トルク発揮に及ぼす影響. 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 小倉裕司, 辻川比呂斗. 第61回日本体力医学会, 2006. 9
- ⑲ 中高強度身体活動計 NL-1000の有用性. 綾部誠也, 熊原秀晃, 森由香梨, 形本静夫, 内藤久士, 田中宏暁. 第61回日本体力医学会, 2006. 9
- ⑳ クレアチン摂取が暑熱環境下における長時間間欠的運動のパフォーマンスに及ぼす影響. 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 安松幹展, 稲垣雅, 吉村雅文, 青木純一郎. 第61回日本体力医学会, 2006. 9
- ㉑ 中強度身体活動パターンと有酸素性作業能, BMIおよび腹囲との関連性. 綾部誠也, 形本静夫, 黒坂光寿, 熊原秀晃, 田中宏暁. 第27回日本肥満学会, 2006. 10
- ㉒ HPLC-電気化学検出器によるヒト血清中6-ニトロトリプトファンの検出. 嶋田武, 池田啓一, 岩井秀明, 信太直己, 加納達二, 松田繁, 河合祥雄, 形本静夫, 山倉文幸. 第4回日本予防医学会学術総会, 2006. 12
- ㉓ 大学サッカー選手における等速性膝関節トルクと20m疾走能力との関係. 宮原祐徹, 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 鈴木茂雄, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 日本フットボール学会 4th congress, 2006. 12
- ㉔ VMAの有酸素性作業能評価法としての有用性. 綾部誠也, 宮森隆行, 今田英樹, 黒坂光寿, 宮原祐徹, 石崎聡之, 内藤久士, 形本静夫, 吉村雅文. 日本フットボール学会 4th congress, 2006. 12

### 桜庭 景植

#### 【原著】

桜庭景植：中高齢者に対する運動療法の効果.  
リウマチ科 35(4): 339-346, 2006

桜庭景植：成長期下腿・足のスポーツ外傷（足関節捻挫・腓腹筋挫傷・腱脱臼）の治療.  
骨・関節・靭帯 19(4): 311-325, 2006

桜庭景植：（上肢のスポーツ障害とリハビリテーション）  
5）若年の体操選手における上肢障害—あん馬における手関節障害を中心に—

J Clinical Rehabilitation 15(6): 568-573, 2006

#### 【著書】

桜庭景植：整形外科診療実践ガイド, 守屋秀繁編集, 文光堂, 分担執筆: 疲労骨折, シンスプリント, アキレス腱炎, 先天性脛骨偽関節症, 2006

桜庭景植：日米比較に学ぶ「国民主役」医療への道. 町淳二・宮城征四郎編集. 日本医療企画社. 分担執筆; スポーツ・運動と健康への効用. 2006

桜庭景植：TEXT 整形外科学 改訂第3版 糸満盛憲・早乙女紘一・守屋秀繁編集 南山堂, 分担執筆; 第12章 外傷 筋・腱の損傷; 肉離れ, 筋断裂, 腱断裂, コンパートメント症候群, 2006

#### 【シンポジウム, パネルディスカッション】

桜庭景植：トップアスリートの競技力向上のためのスポーツドクターの役割. 体操競技の障害. スポーツドクターとしての努め.

Be wanted! What a sports doctor should be for improving athletes performance?—the roles of sports doctors—

日本整形外科スポーツ医学会会誌, 26(1) 11, 2006.

JOSKAS Combined Congress of Japanese Orthopaedic Societies of Knee, Arthroscopy & Sports Medicine.

沖縄 2006年6月8-10日, 2006年

#### 【講演】

桜庭景植：スポーツ行事と安全管理(2). 日本体育協会公認スポーツドクター養成講習会. 2月26日, 東京, 2006.

講演：過労性スポーツ障害.

東京都医師会健康スポーツ医講習会, 東京, 7月8日, 2006.

講演：アスレチックリハビリテーション（整形外科）.

東京都医師会健康スポーツ医講習会, 東京, 7月9日, 2006.

桜庭景植：捻挫とテーピング（理論）

日本整形外科学会認定スポーツ医講習会. 8月5日, 東京, 2006.

桜庭景植：ラグビー傷害～頸部・腰部傷害，医学生のス  
ポーツ傷害を中心に～

第5回 愛媛県スポーツ研究会 松山市，2006年9月9  
日，2006

桜庭景植：アスレチックトレーナーの役割：スポーツド  
クターとの連携・協力，日本体育協会公認アスレチック  
トレーナー講習会，東京，11月11日，2006.

桜庭景植：膝関節の各種疾患と筋力特性および筋力訓練.  
第8回 Latest Orthopedics 研究会，岡山，12月3日，  
2006

桜庭景植：スポーツ指導者に必要な医学的知識(外科)：  
アスリートの外傷・障害と対策. 日本体育協会スポーツ  
指導者養成講習会，12月6日，東京，2006.

#### 【そのほか】

桜庭景植：(教育ビデオ) 身で見る医学の基礎第2版  
Vol 5 骨格・筋肉系  
企画協力 坂井建雄 原案監修 桜庭景植，医学映像教  
育センター，2006

桜庭景植ほか：競技力向上を目指す！ 求められる競技  
力向上のためのスポーツドクターとは？  
コーチング・クリニック 2006年8号：24-29，2006

桜庭景植：日本医師会ニュース「健康プラザ」No 223  
ストレッチング 2006年7月5日発刊

#### 【発表】

桜庭景植，中澤摩有子，石川拓次，丸山麻子，窪田敦  
之，門屋遙香，戸塚涼子：

スポーツ競技中の短時間の休憩時間における回復手段の  
検討—軽運動，冷却，交代浴を中心に— 日整会誌，80  
(3) s112，2006.

日本整形外科学術集会，横浜，5月18-21日，2006年

坂本優子，桜庭景植，大林 治，川北 鋼，井上 毅，  
迫田順太：

スキーボード外傷—スキー，スノーボード外傷との比較—  
—

日整会誌，80(3) s109，2006.

日本整形外科学術集会，横浜，5月18-21日，2006年

瀬戸宏明，黒澤 尚，桜庭景植，池田 浩，金 勝乾，  
大沢亜紀，高澤祐治，川崎隆之，森尾秀徳：

Partial Patellectomy の治療経験.

日整会誌，80(3) s301，2006.

日本整形外科学術集会，横浜，5月18-21日，2006年

高澤祐治，黒澤 尚，桜庭景植，池田 浩，高澤俊治，  
金 勝乾，大沢亜紀，瀬戸宏明，川崎隆之，森尾秀徳：  
薄筋膜単独による前十字靭帯再建術の治療成績.

日整会誌，80(3) s95，2006.

日本整形外科学術集会，横浜，5月18-21日，2006年

瀬戸宏明，黒澤 尚，桜庭景植，池田 浩，金 勝乾，  
大沢亜紀，高澤祐治，川崎隆之，森尾秀徳：

特発性大腿骨果部骨無腐の臨床成績. 第31回日本膝関節  
学会抄録集，p135，2006

JOSKAS Combined Congress of Japanese Orthopaedic So-  
cieties of Knee, Arthroscopy & Sports Medicine. (第31回日  
本膝関節学会部門)

沖縄 2006年6月10日，2006年

丸山麻子，桜庭景植，星本正姫，山田 樹，高山重光：  
若年女性における「やせ」と運動習慣の違いが体力およ  
び骨密度に与える影響.

第61回日本体力医学会大会. 9月25日，神戸，2006.

体力科学 55(6): 799，2006

河村剛光，本田和寛，吉儀 宏，桜庭景植，青木和浩，  
中丸信吾，戸塚涼子：

動体視力の発育発達と野球におけるトレーニング方法に  
関する研究.

第13回スポーツビジョン研究会，10月7日，2006年

石川拓次，桜庭景植，丸山麻子，窪田敦之，門屋悠香，  
戸塚涼子，関口晃子，引地美果，日暮恭子：

中高年における VTR を視聴しながら自宅で行う運動が  
QOL に及ぼす影響.

日本臨床スポーツ医学会，11月2,3日，新潟，2006.

日本臨床スポーツ医学会誌 14(4): s107，2006.

丸山麻子，桜庭景植，光本雅美，中澤摩有子，石川拓

次, 窪田敦之, 門屋悠香, 戸塚涼子 :

大学ソフトボール選手における突き指の実態調査.

日本臨床スポーツ医学会, 11月2, 3日, 新潟, 2006.

日本臨床スポーツ医学会誌 14(4): s149, 2006.

杉浦雄策, 佐久間和彦, 斉藤知行, 澁谷尚弘, 桜庭景植 :

牽引走による短距離走者のハムストリング肉ばなれとその予防トレーニング.

日本臨床スポーツ医学会, 11月2, 3日, 新潟, 2006.

日本臨床スポーツ医学会誌 14(4): s146, 2006.